

対話と真理

——教育とモラルの復興のために——

檜 垣 良 成

対話型の授業で〈対話〉を深めることに特に困難を覚えるようになって5,6年になる。20年ほど前にはじめて教壇に立ったときから、哲学を専攻するとはかぎらない学生に対して、あるいは、哲学初学者の学生に対して哲学の基礎を教える場合、たとえ講義クラスの多人数の授業であっても対話型の授業が適切であると考え実践してきた。40名から百名を超える教室でも当初はたいへん成果を挙げていた。黙って教室に座っていることも難しい教育困難校においても、特に反抗的な学生をこそつかまえて現実的で単純な哲学的問いを投げかけ、返された答えを元に教室全体で一つの問題を深めていくやり方で授業を構築することは難しいことではなく楽しい営みであった。学生のほうも楽しんでおり、授業が終わっても質問や反論で離さないし、教室外でもつかまえられて議論が続くことは稀ではなかった。放課後に勉強会を予告すれば、必ずしも多数とはかぎらないが一定数は確実に参加者が集まった。卒業生が参加し続けることもあった。問いを工夫しさえすれば、哲学は万人に関心をもたれるものであり、人はみな本当のことを知りたいという強い欲求をもっているのだと確信することができていた¹。

ところが、7,8年ぐらい前からだろうか、従来のやり方では、充実した〈対話〉が望めなくなってきた。必ずしも発言しなくなったというわけではない。できるだけ対決を避ける仕方で各人の発言内容をそのまま尊重すれば、むしろシャイな日本人としては初見での発言は以前より多くなったと言ってもよい。しかし、対立する見解をぶつけ合わせようとしたり、筆者自身が学生の発言内容に疑問や反論をぶつけようとするや否や、あつという間に口数が少なくなるか、相手の見解の内容に正面からは向き合わず、(筆者から見ると)話を逸らせて自己弁護に終始しているとしか見えない発言を続ける傾向が強まったのである。以前であれば、むきになってみんなに訴えかける姿勢も見られたが、最近では、それぞれの発言は閉じた独白のように感じられることが多い。聴衆も発言者に関心を寄せず問題を共有する態勢にないように見えるのである。或る総合科目のリアクション・ペーパーの中に「自分の中に大事な真理があるかもしれないのに、〈対話〉なんかしたら、その真理が失われてしまいかねない」という趣旨の異議申し立てを見つけたときには絶句してしまった。なぜ、こんなふうになってしまったのか。そして、どうすれば、この状態からもっと〈対話〉の充実したコミュニケーションを復活させることができるのか。この問題

七八

¹ 授業の充実は実は学生たちの力によるところが大部分であったと現在では痛感している。私はただ教室にテーマといくつかのアイデアを持ち込み、あとは学生たちに発言の機会を与えただけであった。真理をめざそうなんて言わなくても自然に(大人とは違う)若者らしいオープンな仲間意識が真理探究に直結していた。どんな教育困難校の問題児(と見なされている者)であっても、そうであった。それがどのように変質したのか、その責任は誰にあるのかを本稿は問題にする。

は、教育方法全般の見直しを迫ってくるように思われるが、特にモラル育成に関しては切迫した課題を明らかにするであろう。

1 〈対話〉とは何か

まず、ここで問題にしたい〈対話〉ということで、どういう言語行為が念頭に置かれているのかを確認しておきたい。本稿で言う〈対話〉とは、中島義道氏がそうしたように、〈討論〉（ディベート）および〈会話〉との対比において判明にできるものである。

〈討論〉においては、「なるべく私情を挟まず論理的に相手側を説得する技術が要求される。その人が本心どう考えているかは一応どうでもいい。その人の口から出る論理が説得的であることが重要である」²。競技としてのディベートにおいて典型的であるが、そこで表現される内容は発言者の本心とは必ずしも対応しておらず、また、本当はどちらが正しいのかということについても無頓着である。発言者はみずからの見解の真偽を反省することはなく、ただ相手を議論で打ち負かして勝つことだけをを目指す。こういう「みずからの生きている現実から離れた客観的な言葉の使用法」³、なおかつ、「あくまでも普遍的な真理をめざ」⁴すという姿勢のない言語行為を〈討論〉としておく。

他方、〈会話〉とは、わが国においては最も馴染み深い言語行為であるが、井上達夫氏によれば、「異質な諸個人が異質性を保持しながら結合する基本的な形式」⁵であり、「人間的な触れ合いの場を開くこと」⁶を目的とするものである。それは、「個人と個人が正面から向き合い真実を求めて執念深く互いの差異を確認してゆく〈対話〉をひどく嫌う言語行為であり、「表出された言葉の内実より言葉を投げ合う全体の雰囲気の中で、漠然とかつ微妙に互いの「人間性」を理解し合う」⁷ものである。こういう言語コミュニケーションにおいては、各人の生きた現実からの遊離は生じないが、今度は表出された言葉の文字通りの意味が尊重されず、やはり真理は探究されない。

したがって〈対話〉とは、〈討論〉との対比で言えば、「各個人が自分固有の実感・体験・信条・価値観にもとづいて何ごとかを語ること」⁸であり、より主体的な言語行為であって、「それぞれの個人は交換不可能である」。しかし、〈会話〉との対比で言えば、〈対話〉とは、個人が体験をまるごと背負って語りながらも、「これらをダシにしてあるいは武器にして感情的に訴える」⁹ことを禁じられた言語行為であり、「真理を求めるという共通了解をもった個人と個人とが、対等の立場で」¹⁰、すなわち、「身分・地位・知識・年齢等々

² 中島義道『〈対話〉のない社会——思いやりと優しさが圧殺するもの』PHP新書、1997年、102頁以下。

³ 同書102頁。

⁴ 同書134頁。

⁵ 井上達夫『共生の作法－会話としての正義－』創文社、1986年、254頁。

⁶ 中島前掲書105頁。

⁷ 同書同頁。

⁸ 同書102頁。

⁹ 同書134頁。

¹⁰ 同書122頁。

ありとあらゆる「服」を脱ぎ捨て、全裸になって「言葉」という武器だけを手中にして戦うこと」¹¹なのである。

ポイントは二つある。一つは、〈対話〉こそが、交換不可能な各人の個性を最も尊重できる言語行為であるという点である。〈討論〉というものは、みずからの固有の状況・体験・感受性を消去して交換可能なたちで語るものであるから、端から個性を取り扱うことはできない。しかし、〈会話〉の場合も実は、各人の感情を大事にしているように見えながらも、対立を回避し〈共感〉を目標としているかぎりにおいて、個人間の小さな差異を大切にすることはできず、気持ちや感受性の理解が自己中心のかつ定型的になってゆかざるをえないのである。〈対話〉だけが、対立を恐れないが故に、みずからを偽らずに「相手との些細な「違い」を大切にし、それを「発展」させる」¹²ことが可能であり、「他者を消し去るのではなく、他者の異質性を尊重する社会」¹³を実現するものなのである。

もう一つの留意点は、〈対話〉というものは、確かに安易な〈妥協〉を避け、対立も厭わないものであるが、そこで終わりではなく、その目的はあくまでも皆が合意できる真理ないし真実の追求にあるという点である。そのためには、「自分や相手の意見が途中で変わる可能性に対して、つねに開かれてあること」¹⁴が最重要である。〈討論〉は、勝つための議論であるから、互いに自分の非を認めるはずがなく、合意は必ずしも目指されていない。また、〈会話〉も、表面上の対立は確かに避けようとするが、そのためであれば、真実などどうでもよいする言語行為である。〈会話〉が発達するのは、閉鎖的な共同体においてであるが、確かに誰も出れない輪の中では、どっちが正しいかと争っても仕方ないわけで、お互いが譲り合って何とかやってゆくことが一番になる。そこでは空気の流れに沿うことが無条件に正しいことであり、対立はすべて悪となりがちである。外部から見ても、いくら間違っている、また、メンバーの一人がそのことに気づいても、その誤りを認めることが共同体を破壊することになるのであれば、ここで誤りが受け入れられることは原

¹¹ 同書 123 頁。

¹² 同書 133 頁。

¹³ 同書 204 頁。

¹⁴ 同書 133 頁。

¹⁵ こういうコミュニケーションも、家族のように一生抜けられない関係においては極めて重要である。20 年ほど前に、グレゴリー・クラーク氏が或る講演で、「家族との関係では私も日本的なコミュニケーションをしますよ。でも、残念ながら欧米人は、いったん外へでれば、変わってしまうのです」という趣旨のことを言っていた。彼は、日本人のコミュニケーションのやり方を高く評価し、「思想」がない素晴らしさを説いた。欧米では、宗教が違うというだけで、寮で同じ部屋になっても口をきかないということがありうる。でも、日本人はいったん仲良くなれば、宗教が違おうが、どういう思想をもっていようが、関係なく、赤提灯にも連れて行ってくれるし、生活をともにできる。これは、人の生き方として優れているというのである。こういう文化は、アジアでも珍しく日本人独自のものだと言っていた。しかし、こういうふうになんていうのは、まだ日本に外国人が多くなくて、また、彼らが外面的に日本人に合う姿勢がある場合にかぎられたことのように思われる。確かに日本人は「思想」にはこだわらず寛容で内面に立ち入らないが、このことの弊害を本稿は明らかにしておく。また、今後は外面的にも異文化を意識せざるをえない時代になると思う。そうなっても日本人全般が、クラーク氏が評価したようなふるまいができるかどうかは疑問である。

理的にありえない。十分な閉鎖性ないし同質性が前提できる社会では、真理の探究は疎外されがちなのである。こういう社会において対立を回避するために発展するのが〈会話〉というコミュニケーションであるが、それは実は互いを拘束して同質化を促すものであり、真理の追究は必ずしもめざされていないのである¹⁵。

〈対話〉だけが常に真理ないし真実をめざすという形をとりうる言語行為である。〈会話〉との対比でわかるように、真理をめざすという形をとるということは、裏を返せば、この言語行為の現場では多様性が自明視されているということの意味する。互いの間に看過できない差異が現前するという了解があるからこそ、対立が存在することも許容でき、しかしそれにもかかわらず、互いを認め合うために皆が合意できる真理をめざすのである。

2 サンデルの〈尊重〉

マイケル・サンデルは、有名な「ハーバード白熱教室」の最終回で、道徳や宗教のみならず、ロールズが普遍的なものとして確保したはずの正義そのものについても、人々の意見が異なるのは当然だということを確認した上で、では、「どうしたら、意見の合わない同胞市民を尊重することを認める社会に辿りつくことができるだろうか」¹⁶という問いを立てる。

リベラルな観念では、同胞市民の道徳的・宗教的信念を尊重することは、いわば、それらを政治的目的のためにあえて無視することである。そういった道徳的、宗教的信念を脇に置いたまま、それらには触れずに、自分たちの政治的な議論を進めることである¹⁷。

リベラリズムにおいては、異なる価値観と出会ったとき、それを無視し、そっとしておくことこそが異質なものの〈尊重〉だと考えられる。彼らは、道徳や宗教とは違うレベルに正義や法を置き、これについては何人たりとも侵害できないと断定する。しかし、人権にかかわるこの最も形式的で普遍的な価値以外の具体的な価値観については、各共同体の、究極的には個人の〈自由〉であって人がとやかく言うことではない。不快であれば互いに無視して棲み分けよというわけである。無用な対立を避けて共生するというアイディアには確かに一理あるし、対立の根深さを目の当たりにした場合には、すこぶる現実的な選択だと思われるかもしれない。

しかし、その最も普遍的で不可侵の法というものは、本当に議論の余地なき普遍的なものとして獲得済みなのであろうか。この点についてサンデルから異議が提出された。人は全く中立の立場に立って物事を裁くことに耐えられない。必ず特殊な価値観を混入させているというのである。正義と善は切り離すことはできない。だから、普遍的な法というものは、それを既定のものと見なすかぎりにおいては、不当な専制に道を開くものである。

¹⁶ マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業』〔下〕ハヤカワ文庫、2012年、269頁。

¹⁷ 同書同頁。

また、棲み分けることで互いに対する偏見が助長され、かえって共生不能な事態を惹き起こすこともある。不可侵の正義を確定し、あとは棲み分けるというやり方は、決して真の意味での多様性の〈尊重〉にはつながらないというのである。サンデルは言う。「私たちが同胞市民の道徳的・宗教的信念を尊重する方法は、ほかにもある」。

それを見做すのではなく、それらに関わり、関心を向け、ときには挑み、競い、そしてときには、耳を傾け学ぶことだ¹⁸。

そっとしておくのではなく、むしろ積極的にかかわってゆくことこそが、他者を〈尊重〉することになるというのである。その際、当然のことながら、対立も生じる。

道徳的、宗教的に配慮し関与する政治が、いかなる場合でも合意につながるという保証はない。それが他者の道徳的、宗教的な信念を深く理解することにつながるという保証もない。宗教的、道徳的な教義をより深く学ぶことで、結局それがさらに好きでなくなることは常にありうる¹⁹。

確かに、知らなければネガティブな感情をもつこともなかったのにとすることはあるだろう。異質な他者にかかわっていても、好きになるどころか、理解し合うことさえできないかもしれない。それなのに、「他者を深く考え、関与していくこと」がより適切だと、サンデルはなぜ言うのか。それは、現代の私たちが「多元的な社会」に生きているからである。

私たちの道徳的・宗教的な意見の相違が存在し、人間の善についての究極的な多元性が存在する限り、私たちは道徳的に関与することでこそ、社会の様々な善を、より深く理解できるようになると思える²⁰。

私たちは前節で、〈対話〉とは何かを見た。そこで明らかになったことは、〈対話〉という言語コミュニケーションは、人々の間で多様性が自明視されている場面でこそ切実になるということであった。そして、そうした差異を前提できるからこそ、対立というものを許容することができ、しかしそれにもかかわらず、互いを認め合うために皆が合意できる真理をめざすのが、〈対話〉であった。サンデルの言う第二の〈尊重〉は、あの〈対話〉と軌を一にするものではないか。サンデルが注目した学生アンドレア・メイローズは、

人々の生活は、世界をどのように見るかに左右されるのに、国家が中立でいることは

¹⁸ 同書同頁。

¹⁹ 同書同頁以下。

²⁰ 同書 270 頁。

できるのでしょうか。……政府の役割は、人々が、何がよくて何が悪いかを集合的に理解して生きることを助けることだ、と思います²¹。

私たちは、世界観なしに生きることはできない。しかし、世界観や人生観は単に個人的なものではなく、「集合的に理解」されるはずのものである。目の前の人とはたまたま私の世界観に反対かもしれない。そのことは許容できる。しかし、私の世界観に賛同する人が一人もいないことに耐えることは可能なのか。それは無理であろう。価値観というものは、たまたま目の前の人はいろんな事情で今は私の考えに賛成してくれていないが、この考えは条件さえ合えば本来皆に合意してもらえるものだ、と思えるようなものでなければならぬだろう。そうでなければ、ただの個人的感想にすぎない。ここに合意できる真理をめざすという側面を見いだすことは可能である。

ただし、前節で見たかざりでの〈対話〉においては、個人と個人との間の差異や対立が主題であったのに対して、アンドレアは、「自己というものは、ある程度までその人が属するコミュニティや伝統や歴史によって規定され、負荷をかけられている存在である」²²という、サンデルも同意するコミュニタリアニズム的な〈自己〉理解を踏まえて、自己を支える既定の集合的理解があるということをまずは念頭に置いて発言しているので、この既定の理解に関するかざりにおいては「普遍的真理をめざす」〈対話〉との違いを見いだすことも可能である。しかし、次のように言う。

多くの人の信条は、信仰により決定されます。私もキリスト教徒でカトリックです。私はよく考え、祈り、たくさんの人と話したうえで、「同性愛は罪である」というカトリックの見解に反対だと判断しなければなりません²³。

アンドレアは確かに、自分の信条がまずは自分が属するコミュニティの既定の価値観に規定されていることを認めている。しかし、その価値観に縛られて終わりなのではないことも語り始めている。

神と自分の個人的な関係の中でその結論が出ると、いやに宗教的に聞こえますが、多くの人は信仰から自分の信条を引き出しているんです。私は、国が同性結婚を許すのに賛成だと言えるようになりました。なぜなら、私自身が承認できるようになったからです²⁴。

全くの中立の立場から信条は生まれぬ。この点の強調がコミュニタリアニズムの特徴である。しかし、アンドレアは、自身の見解が自分が属するコミュニティの信仰箇条に縛られてよいとは考えていない。この信仰を引きずりながらも、そして、それと向き合いなが

²¹ 同書 255 頁。

²² 同書 192 頁。

²³ 同書 256 頁。

²⁴ 同書同頁。

らも、たくさんの人と話し、よく考えることによって、その信仰箇条に反対する見解を（信仰によって負荷をかけられている）〈自己〉自身が承認することも可能だと言うのである。このことが可能であるためには、自分のコミュニティとそれとは異なる立場の間にまたがるような普遍的な真理の存在が前提されていなければならない。

通例、コミュニタリアニズムは、「普遍主義」（Universalism）に対立する立場とされるので、コミュニティの枠を超えた普遍的な真理の存在を認めないと思われるかもしれない。しかし、少なくともサンデルは言う。

「コミュニタリアニズム」が……正とはある時代のあるコミュニティで主流をなす価値観に依存すべきものだという考え方の別名であるかぎり、私はそれを擁護しない。……争点は、……善き生について特定の考え方を前提とせずに正を規定し、正当化できるかどうか〔だけ〕である。……ある種の個人的権利は非常に重要なものであり、公共の福祉ですらそれを踏みにじることは許されない。……正義を因習の産物としてしまえば、その批判的な性質を奪うことになる²⁵。

彼は、「ハーバード白熱教室」を見てもわかるように、異なる立場の学生同士を競わせて何が正義かを明らかにしようとしている。また、世界中に出かけて、同じ問題について対話を繰り返している。このことに必然性があるとすれば、特定のコミュニティを超えた普遍的な真理を少なくとも「めざす」ことは可能であるということが前提されていると思われる。そうでなければ、異なる立場を「批判」ということは許容されないだろう。それぞれにそれぞれの真理があるという「相対主義」では、相互に干渉する権利がないからである。

ただ、アンドレアそしてサンデルは、私たちは中立の立場から正義について論じることができないということ、中立的な普遍的原理から演繹的に正不正を正当化できないということを強調しているが、これも、前節で見た〈対話〉との齟齬を示すどころか、むしろ、同質性を証明している。というのも、〈対話〉は〈討論〉と違って「自分の状況と相手の状況とを見渡す公平な（第三の）視点を得るのではなく（それは得られない!）、あくまでも自分の状況にとどまったまま」²⁶、みずからの「人生をまるごと背負って語ること」²⁷だからである。なるほど確かにコミュニタリアニズムは、みずからが背負っている状況の「集合」性を強調するが、中島氏の言う「状況」もその可能性を排除しているわけではない。人生をまるごと引きずって語る以上、その内容は単なる瞬発的個人的感情の発現ではありえず、多くの人とのかかわりの中で形成された或る種の物語としての文脈をもち、固

²⁵ Michael J. Sandel, "The Limits of Communitarianism". in *Public Philosophy - Essays on Morality in Politics*, Harvard University Press, 2005, pp.252-254. マイケル・サンデル「コミュニタリアニズムの限界」(『公共哲学』ちくま学芸文庫、2011年、373頁以下)。この文章の初出は、*Liberalism and the Limits of Justice*, 2nd edition, pp.ix-xvi, Cambridge University Press, 1998 (『リベラリズムと正義の限界』原著第2版、勁草書房、2009年)。

²⁶ 中島前掲書 136 頁。

²⁷ 同書 134 頁。

有性を示すと同時に普遍性要求をするような思想の様相を呈しているはずだからである。〈対話〉という言葉コミュニケーションを理解するにあたって、個人と個人の間の多様性に強調を置くか、「多元的な社会」に注目するかの差異は重要ではなく、〈自己〉（コミュニティにも規定された）の「固有の状況・体験・感受性をまるごと引きずりながら、しかも」、その枠を超えてオープンに「客観的真理を求めて語り出す」²⁸と言う点において、サンデルの〈尊重〉の仕方も優れて〈対話〉的なのである。

さて、サンデルの言う第二の〈尊重〉（〈対話〉）の現代社会における必要性の議論に戻ろう。サンデルは「ハーバード白熱教室」の初回の最後に、哲学（的〈対話〉）をしない懐疑主義の言い訳を紹介していた。

私たちはいろいろなケースや原理について議論をしたけれど、何も解決しなかった。アリストテレスやロック、カントでさえ、長年かけても解決できていないのだから、この講堂に集まった私たちが一学期の講義で解決できるわけがない。要するに、各自が自分なりの原理を持てばいいのであって、それ以上の議論は必要ない。論じても無駄である²⁹。

この言い訳に対するサンデルの答えは次のようなものであった。

確かに、これらの問題は長年にわたり議論されてきた。しかし、それが繰り返され、議論され続けてきたというまさにその事実が、この問題の解決はたとえ不可能であっても、議論を続けることは避けられないということを示唆している。なぜ避けられないかという、私たちは毎日、これらの疑問に答えを出しながら生きているからだ³⁰。

江戸時代の日本のように、異質な価値観をもつ社会とは隔絶された形で生きてゆけるのであれば、サンデルの言う第二の〈尊重〉は必要ないかもしれない。生まれてから死ぬまですべて同じ顔ぶれの中で過ごす地域共同体での生活では、共同体の枠をはみ出してしまうような真理の探究など害悪以外の何ものでもないであろう。「毎日、これらの疑問に答えを出しながら生きている」という現状は、以前の日本には存在していなかった。それが日本に哲学（的〈対話〉）というものが馴染まなかった原因である。

しかし、現代日本においては、もはやそのような閉鎖的で同質的な共同体が温存される場所はほとんど残っていないと言ってよいであろう。人々の移動はせわしく、インターネット等の情報流通がリアルタイムで世界中につながったものとなり、グローバル経済の波の中にある社会では、いやがおうにも多様な価値観に触れざるをえない。そういう「多元的な社会」、究極的には個々人がばらばらの多様性を示しうる社会に生きる者にとって

²⁸ 同書 135 頁。

²⁹ マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室講義録』〔上〕、30 頁。

³⁰ 同書同頁。

は、目をつむって生きるのではないかぎり、異質な価値観との対決は本来回避できないことのはずである。そうであるなら、みずからの自明の価値観を超えて真理を追求する〈対話〉が共生のために必要になってくるのも当然である。これが、日本においても多様性の〈尊重〉が第二のやり方（〈対話〉）に変わらざるをえない理由である。

サンデルは、「懷疑主義は人間の理性の休憩所である。そこは独善的なさまよいを熟慮できるところだ。しかし、永久に留まる場所ではない。単に懷疑主義や自己満足に従っても、理性の不安を克服することは決してできない」³¹ というカントの言葉を引用しながら、この講義の目的はむしろ「理性の不安を目覚めさせ、それがどこに導いていくのか見ることだ」と講義の初回に述べていた。最終回の最後になって、この発言を受けて言う。

君たちが、多少はこの不安を経験してくれていればいいと思う。なぜならこの不安は、批判的な考え方や政治的な改善、そしておそらく道徳生活さえも活気づけるものだからだ³²。

そして、議論が終わらないことをむしろ望ましいこととして講義を締めくくる。

この講義の目的は、理性の不安を目覚めさせ、それがどこに通じるかを見ることだった。我々が少なくともそれを実行し、その不安がこの先何年も君たちを悩ませ続けるとすれば、我々は共に大きなことを成し遂げたということだ。ありがとう（拍手）³³。

不安を隠蔽せず大事にし続ける習慣が身についたとすれば、批判的に考え、社会に責任をもって政治を改善し、善き生を追求し続ける、〈対話〉し続ける〈市民〉が育成されたということを意味する。

3 現代日本における〈対話〉の困難

さて、日本でもサンデルの「ハーバード白熱教室」はたいへんな人気を博した。このことは筆者には不可解であった。筆者の実感では、近年、〈対話〉を忌避する学生が増えていくからである。いや、実は若い人たちは〈対話〉を求めているのか。筆者の授業のやり方に問題が生じているだけなのか。それならば、希望が持てる。そう思おうとしていた矢先、或る学会で知り合いの研究者に、「サンデルが流行っているのは、相対主義的に観戦しているだけだからだ」という指摘を受け、はっとした。そう言えば、思い当たる節がある。また、或る学生からは、「あれはテレビだから。先生に当てられることもないから（笑）」とツッコミが入った。

³¹ 同書 31 頁。〔下〕、271 頁も参照。

³² 〔下〕、270 頁。

³³ 同書 271 頁。

最初に〈対話〉型授業の困難をはっきりと自覚したのは次のようなエピソードにおいてである。いつものように、問題提起をして答えを募り、どの答えが真理に近いのかを検討していこうとしたところ、「どの答えもオシリー・ウシなのだから、一つの真理をめざすべきではない」という異議が提出され、かなりの学生が賛同し、〈対話〉を拒絶する空気が教室に充満したのである³⁴。もちろん、学生が納得していないのに教師が或る答えを正しいと決めつけるようなことは〈対話〉型授業では認められないだろう。また、皆で一度出した答えは正解と確定し再考の余地を認めないというようなことも真理の探究においてはあってはならない。しかし、各人が出した答えがそのまま認められ、何ら批判されない場合に、真理を追求していると言えるのだろうか。哲学的な問いといえども、問いの文脈を限定すれば、おのずと答えの候補は絞られてくるはずである。もちろん、最終的にも複数の答えが拮抗し、決着をつけがたい問題というものはある。哲学的に問題が根本的なものへと深められれば深められるほど、答えの候補は絞られても、究極的には一つに決められないということが判明する。しかし、その場合は、なぜ白黒つけられないのかの理由が明らかになるだろう（或る意味では、これが一つの真理である）。少なくともそれまでは一つの真理がめざされるべきではないか。最初から〈対話〉を回避し、各人が思ったことを言うだけというのは、真理の探究とは言えないのではないか。

真理の探究に対する学生たちの意欲が弱まっていることを実感した筆者は、今までどおり授業でいきなり通常の哲学的問いを投げかけても相対主義に逃げられるばかりだと思い、翌年度の授業の冒頭で、まずは真理（善）探求の姿勢を引締めるために思い切った挑発的問題提起を行なうことにした。理論的な真理の問題は学生たちにとっては必ずしも切実な問題ではない。しかし、善の問題は自分の人生にかかわってくるので、ないがしろにはできないであろう。そこで、2008年3月に民家の住人を殺害後、JR荒川沖駅で通行人を無差別に襲い、1人を殺害、7人に重軽傷を負わせた、いわゆる土浦無差別殺傷事件の金川真大被告の発言を採りあげ、その常識はずれではあるが哲学的に筋が通ったかに見える内容に対する反発を引き出し、〈善〉というものの存在の切実さを実感してもらおうと思ったのである。土浦という場所は大学からも近いので、より現実味をもって受けとめてもらえるだろうと考えた。しかし、他人事ではなく自分自身の問題として受けとめてもらえるよう学生たちの内面に切り込むこの試みは、20年前であれば効果的であったかもしれないが、現代の学生たちの現状にはそぐわない軽率なものであった。結果的に、この年度の授業は筆者がこれまでに経験した授業の中でも最も荒れたものになり、学生との〈対話〉の充実感が全体としては最も乏しいものになってしまったのである。

2009年6月3日の法廷で殺人の善悪を問われた金川被告は、「善悪自体存在しません」と答えたが、雑誌『創』の編集長篠田博之氏へ宛てた手紙で次のように敷衍する。

³⁴ この年度以降、この「一つにすべきでない」という原則が、水戸黄門の印籠のように、教室内に現われることに気づいた。次節で見るような〈相対主義〉の批判を経たあとでも、「そうまでして、なぜ一つにしようとするのか、わからない」という感想が後を絶たない。筆者には逆に、一つにしないという、その強い拘束性が不思議だったが、のちに見るように、実のところそれ自体が一つの価値観に縛られたものであること、そして、その逆らえない一つの価値観にいつも抑圧されているために、せめてここでは自己を守りたいという思いに由来するということが判明するであろう。

善や悪は関係ありません。有罪、無罪も関係ナシ。死刑・無期も同じ。俺が死なないなら、かわりに貴様が死ぬ。ただそれだけ。すごく単純。俺を裁くことは不可能です。何故ならオレはライオンだからです。ライオンが人を殺したとします。裁判にひっぱって行って、有罪判決にしたとします。アンタらは悪を裁いたと、正義を守ったと喜びますが、はたしてライオンは裁かれたとを感じるでしょうか？ 人間側のひとりよがりです。人間が裁くことが出来る相手は、同じ概念、常識、価値感〔ママ〕を共有している人間だけです³⁵。

篠田氏によると、実際に会って見た金川被告の印象は、流布されていたイメージとは全く異なり、事件のことを別にすれば「好青年」という印象に近いものだったという。質問への反応の仕方も真摯なものだったらしい。ただ、「つまらない社会で生きるなら死んだ方がまし」という一貫した考えを持ち、武士のような強さをもっているわけでもなければ絶望しているわけでもない自分は自ら直接命は絶てないので、死刑になるために事件を起こしたというのである。

こうした金川被告の主張をどう思うかと学生たちに問いかけ、「そんな勝手な考えがあるものか!」という反発を期待したところ、そういう予想された反応はほぼ現われず、「善悪が存在しないという彼の主張は正しい。彼を裁くことができないというのも、そのとおりだ」という意見が続出し、その場でこの意見に反対する学生は（少なくとも表立っては）一人もいなかったのである。「それでは、彼を罰することも不当なのか？」という筆者の問いかけには、「一応、共同体のルールを破ったのだから、罰は受けてもらわなければならない。ただそれは、彼の言うとおり、裁くということではないだろう」と躊躇なく言うのである。なぜ彼は罰を受けるのが〈当然〉（正当）なのか。そこに矛盾はないのか。また、彼は死刑を望んでいるのに罰になるのか。ニーチェを持ちだして善悪を否定する学生が多いのであるが、そうでありながら、法律を盾にとって厳罰を正当化する彼らの主張は、それこそまさにニーチェが批判する「奴隷道徳」そのものになってしまっているはいないか。こうした指摘を繰り返しても、以前のようにその理屈が彼らを劇的に揺り動かすこ

³⁵ 『創』2010年2月号、121頁。ちなみに金川被告が座右の書としていたのは、永井均『子どものための哲学対話』（講談社、1997年）である。その書では、ペネトレという猫と「ぼく」が対話しており、確かにペネトレは、「集団になじめない場合は外に出ればいいんだけど、世の中そのものの外に出ることはできない。だから、きみが世の中の常識は受け入れるか、受け入れたふりをしなければ、きみは世の中に殺されるかもしれないよ」という趣旨のことを言って「世の中は、死ぬつもりならなにをしてもいいって、暗に認めているってことなんだよ。認めざるをえないのさ」（117頁）というセリフも述べている。しかし、だからといって、この書を禁書にし、哲学的対話を世間で禁止すればよいということになるだろうか。一昔前であれば、その方策も或る程度の効果をもったかもしれない。しかし、現代では、情報を封鎖することは至難の業である。ネット等の情報までも規制したとしても、必ず抜け穴はある。私たちは、隔離によってモラルを維持することはもはやできない。むしろ「考え抜く」ことを促さなければならぬ。のちに詳しく論じるが、〈正解〉を与えるのではなく、〈真理〉を探究させることによってしか、もはやモラルを維持することは不可能な状況になってきているのである。

とはなく、自分の真理を否定されたことに対するわだかまりが広がり、その後も全体として〈対話〉の充実した授業風景を取り戻すことはできなかった。

筆者はこのとき目の前に金川被告がたくさんいて、ただ、たまたまこれまでの人生が幸運だったが故に彼らは犯行に及んでいないだけのような思いにとらわれた。しかし、これは被害妄想だろう。仮に彼らが金川被告と同じような思想をもっていたとしても、現実に関行に及ぶにはまだ数々の条件をクリアしなければならぬし、そもそも、筆者の誘導尋問に反発して偽悪的にふるまっているだけかもしれないのである。しかし、一つはつきりしていることは、反発からであれ何であれ、第1節で見た〈対話〉および第2節の〈尊重〉の前提となるような意味での〈真理〉の存在の意識、あるいは、そうした〈真理〉に対する誠実さのようなものが極めて希薄になっているという点である。彼らは相対主義的な視点に立って自分の真理を守っているのかもしれないが、そこで守られているものは、〈真理〉というよりは自分の感情であり、体面にすぎない。そうしたものにこだわらずに乗りこえるだけの〈真理〉への信頼が以前の日本人に比べても弱くなっているのである。その後の授業で多くの学生は、自分が実は普遍的な〈真理〉や〈善〉の存在を前提していることを自覚してくれた。のちに詳しく見るが、現代の若者たちは或る事情によって、普遍的な〈真理〉や〈善〉が存在しないと信じ込まされているだけなのである。

元より、現代流行りのニーチェ自身は果たして本稿の第1節および第2節で確認したような意味での〈真理〉の存在を、あるいは、このレベルでの〈善〉の存在を疑っていたのだろうか。そうではないと思われる。彼が異議申し立てをしていたのは、当時の一部のキリスト教徒があたかも自らが普遍的な真理を既に手中にしているかのようにふるまい、その特定の真理ないし善でもって人々を支配しようとしていることに対してであって、この異議申し立てそのものが、広い意味での〈真理〉ないし〈善〉の存在を前提したものなのではないだろうか。それなのに、現代の若者の間ではニーチェやポスト・モダンの思想が流行し、普遍的な〈真理〉や〈善〉そのものに対する侮蔑のような空気が支配的になるという本末転倒のような事態が生じているように思われるのである。それも、特に哲学や思想に関心をもつ学生たちの間でこの傾向が強いのが気になる。こうした現象はいかにして惹き起こされたのか。

4 相対主義と個性化教育

金川被告を採りあげた授業の失敗を教訓にして、その翌年度以降の授業では、学生たち個々人の相対主義的な思想傾向を直接批判するようなことは避けて、授業の最初の問題として「そもそも正義というものについて相対主義は可能なんだろうか」という問いを挙げ、これをいわば他人事として検討することにした。

素朴な道徳的相対主義とは、簡単に言えば、

①「正しい」は「或る特定の社会にとって正しい」を意味する。

②したがって、或る社会の人々が他の社会の価値を非難したり、これに干渉したりするのは不正である。

というものである。異なる価値観はそっとしておくべきであり、立ち入るべきではないという主張は、まさしく〈対話〉ないし第二の〈尊重〉に反対するものであり、真理は各人

のものであるとする学生たちの〈対話〉拒否の姿勢と重なるものである。したがって、この素朴な道徳的相対主義の是非を、いわば客観的に学生と一緒に検討することを通して、彼ら自身の姿勢も反省してもらおうというわけである。

まずは、率直に「普遍的な正義というものはあると思いますか」と問いかけ、アメリカの正義とイスラムの正義との対立などを採りあげながら上の素朴な道徳的相対主義を紹介してリアクションを求める。案の定、普遍的な正義はないとして素朴な相対主義に賛成する意見が大勢を占めることは言うまでもないが、その際、注意を引くことは、「あるかないか」という問いに「既に現実そこに思いだせるかどうか」という客観的事実でのみ答えようとする傾向が強いということである。ないと答える者がそのような視点をとることは理解できるが、あるという答えの中にも根底に共通のものが（現に）あるという仕方では考えようとするケースが少なくない。つまり、学生たちは正義に対して受動的であって観察的な仕方でのみ問いに答えようとしているということである。これから自分たちが実現してゆくべきものだという、実践的な視点をとる回答は多くない。それどころか、普遍的な正義のようなものが存在するのであれば、戦争など起きず、平和が実現しているはずだというような意見もある。ここには、実際に力をもって自分たちに恩恵をもたらしてくれるものでなければ認めないという、受動的な享受の姿勢がうかがわれるだろう。

例年ここで、先に見たような相対主義の主張はそもそも論理的に矛盾しているというバーナード・ウィリアムズの批判を紹介する。彼によれば、かの主張は明らかに一貫性を欠いたものである。なぜなら、それは②において、他の社会のことを扱う上での正しいことと不正なこととについて、或る主張をしているが、この主張は①では許されていない「正しい」の非相対的な意味を使っているからである³⁶。

ちなみに、サンデルのところで見た、リベラリズムにおける異なる価値観（善）の尊重の仕方は、そこだけを見れば、相対主義と重なるものである。しかし、注意しておくべきことは、リベラリズムは、その名のとおりに、自由（ないし人権）を普遍的な価値をもつものとして絶対化しているのであって、その意味では普遍的な正義を誰よりも肯定する立場であるという点である。

普遍的な正義の存在自体を認めない学生たちは、この点を文字通りにとれば、リベラな立場というよりも素朴な道徳的相対主義の立場にあると言わざるをえない。しかし、そのような立場は論理的に成り立たないのであるから、実際には別の立場をとっていることになる。そのことを明らかにしてくれるのが、次の学生のリアクションである。これは、素朴な道徳的相対主義を、現代日本の教育界で常識となっている「個人の価値観の尊重」という思想と重ね合わせたときの反応である。

本当に意見がそれぞれであり、自分と異なる意見も尊重すべきであるのならば、「自分と異なる意見は完全に論破して駆逐すべきだ」という意見も尊重されるはずで

³⁶ Cf. Bernard Williams, "An Inconsistent Form of Relativism". In *Relativism - Cognitive and Moral*, edited by Jack W. Meiland and Michael Krausz, University of Notre Dame Press, 1982, p.171. バーナード・ウィリアムズ「一貫性を欠く形の相対主義」(J. W. メイランド、M. クラウス編『相対主義の可能性』産業図書、1989年)、321頁以下参照。

ある³⁷。

しかし、素朴な道徳的相対主義に賛成する大部分の学生は、そんなことはとんでもないと感じるであろうというのである。そこで、実は「正義ないし個人の価値観はそれぞれであるから、互いに干渉してはならない」のではなく、逆に「相互に干渉してはならない」が普遍的な原理として先行しており、「正義ないし個人の価値観がそれぞれである」という見解は、この原理を補強するかぎりでは援用されているにすぎないということが判明する。

では、「相互に干渉してはならない」のはなぜか。素朴な相対主義ないしは個人の価値観の尊重という思想によって〈対話〉を避けるとき、そこで守られているものは何であろうか。価値観ないし〈真理〉というものは本来、普遍性を要求するものであるから、ここまでして隔離してしまうのはおかしい。さしあたり、反対されることによって傷つけられる各人の感情や体面を守っていると言ってよいように思うが、さらに言えば、1980年代後半以降に教育界に浸透した或るキーワードが思い浮かぶ。それは「個性」である。わが国では「個人の価値観の尊重」も「個性の尊重」もほぼ区別なく語られているように思われるからである。

1984年に設置された中曽根内閣の臨時教育審議会が1987年に提出した「教育改革に関する第4次答申（最終答申）」では、「個性重視の原則」が次のように述べられている。

今次教育改革において最も重要なことは、これまでの我が国の根深い病弊である画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則、すなわち「個性重視の原則」を確立することである。この「個性重視の原則」に照らし、教育の内容、方法、制度、政策など教育の全分野について抜本的に見直していかなければならない。

戦前からの立身出世主義の見直しを迫るこの答申によって、わが国の教育政策は個性主義へと大きく舵を切ることになったが、1997年の神戸児童連続殺傷事件等を受けて「心の教育」というもう一つの新たな教育理念と重ねられて、当初予定されていた「できる子」と「できない子」の選別を促進するというよりも、「個性的であること」自体を道徳的に望ましく称揚される価値として積極的に求める教育へと変質した結果、子どもたちは個性的な自分でなければならないという強い焦りを覚えるようになったと社会学者の土井隆義氏は指摘する。「今の平凡な自分は『本当の自分』ではない、『本当の自分』はもっと輝いているはずだ、そう思い込もうと躍起になりはじめた」³⁸というのである。競争主義的な教育に対する反省と重ね合わせられた個性化教育は、子どもたちの豊かな心の涵養を目指すために、たとえ個性といえども、他者と比較されたり、評価されたりするものであってはならないと考えるものとして定着し、子どもたちの「個性」観は内閉化、孤立化の一途をたどったのである。

³⁷ 2014年5月1日筑波大学人文学類「哲学通論」に対する学生A.I.のリアクションより。

³⁸ 土井隆義『若者の気分 少年犯罪〈減少〉のパラドクス』岩波書店、2012年、96頁。

現代の若者たちは、自分を取りまく人間関係や自分自身を変えていくことで得られるものをではなく、生まれもったはずの素朴な自分のすがたを、そのまま自らの個性とみなす傾向にあります³⁹。

この〈自己〉観は、「原子論的」と言われるリベラリズムの自己をさらに孤立化させたものであるように思われる。しかし、サンデルも言うように、〈自己〉とは本来、社会によって規定されるものではないだろうか。

しかし、現代の若者たちにとっての個性とは、他者との比較のなかで自らの独自性に気づき、その人間関係のなかで培っていくものではありません。あたかも自己の深淵に発見される実体であるかのように、そして大切に研磨されるべきダイヤの原石であるかのように感受されています。その原石こそが「本当の自分」というわけです。「私にだってダイヤの原石が秘められているはずだ」とさしたる根拠もなく誰もが信じているのです⁴⁰。

「個性」や「本当の自分」が、これほどまでに内閉化しているのであれば、そして、「価値観」がそれと一体であるのであれば、それが他者と「一つになるべきでない」のは当然であるし、他者から批判されるいわれがないのもわかる。リベラリズムでもありえないほど内閉化したこのような〈個性〉観はなぜ日本に浸透することができたのか。それは、「和の精神」をモットーとする集団主義をベースにもつ日本の学校教育の現場に欧米の個人主義が流入したとき、本来あるべき個と個の間の建設的な対立というものが骨抜きにされ、基本的には同質的な集団化を課せられたまま内面においてだけ認められたのが、この〈個性〉だからだと思われる。「個性」というのものは、それをもし本当にすべて尊重しようとするならば、人によってはおぞましく感じられるものや、多くの人にとって迷惑極まりないものも尊重しなければならないという難問が生じるはずである。わが国においてこうした問題意識が顕在化していないのは、ひとえに〈相対主義〉的に互いにかかわらない仕方で、それぞれに内閉した形で〈個性〉が尊重されているからにほかならない。学生のリアクションの中でも〈相対主義〉と学校教育との関係が〈個性〉と絡めて語られる。

個人の考えを尊重することは、推奨されるべきよいことで、人間が実践すべき義務でありかつ享受すべき権利であると思っていた。……学校教育によりこの考えが身についたのかもしれない。「一人一人の個性を大切にしながら生きましょう」「自由や平等を得て生きることは素晴らしいのです、それらを認められなかった人たちのことを勉強してみて実感したでしょう」個性・自由・平等を礼賛していた学校教育。……私は私で生きていいんだ、他の人たちもそれぞれそうやって生きていけばいい。理解してくれなくても別に否定されないし、私もしない。……楽な考え方だ。誰も傷つかな

³⁹ 土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える』岩波ブックレット、2004年、26頁。第2章のタイトルは「内閉化する『個性』への憧憬——オンリー・ワンへの強迫観念——」である。

⁴⁰ 同書 27頁。

い。「私は私、あなたはあなた。みんな違うけどそれぞれを認め合おう」そんな態度では充実した議論なんてできないし、導き出されるべきことは決して出ない。ものごとを真摯に考えようとする姿勢も失われると思う。自分が傷つくこと、相手を傷つけることに躊躇し、面倒くさくて難しいことは考えたくないという人は相対主義という立場を採用してしまうのではないか⁴¹。

ここで言われた「尊重」が〈相対主義〉的なものであることは言うまでもない。それが学校教育によって浸透したものであることが語られている。次のようにはっきりと〈相対主義〉教育に言及するリアクションもある。

日本において相対主義がはびこるのは当然だと思う。私は幼稚園の時、金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」という「みんなちがってみんないい」で終わる詩を、正しくて当然のものだとして教わり、「ナンバーワンにならなくてもいい もともと特別なオンリーワン」SMAPの「世界に一つだけの花」という歌を「いい歌」だとして歌わされて来て、今まで相対主義的なものを疑おうと思ったこともなく、無批判に正しいものだとして認識してしまっていた⁴²。

このリアクションを受けて次のようにも言われる。

今回の講義を受ける間、ずっとなるほど確かになと思っていた。……もう一点共感したのは[前回リアクションの中で触れられた]金子みすゞの詩とSMAPの世界にひとつだけの花の歌詞についてである。この2つはわたしも同時期に2つセットで記憶した覚えがあった。無意識のうちに同じ括りの中に入れた。すごく正しいことを言っているという印象を受けた。そして、ずっと頭の中に残っていたのだ。便利な相対主義を植え付けられていたように今回感じた。このような状況は改善するためにはやはり批判する力を身に付けなくてはならないと思う。批判することこそ尊重することであるという考えもすごく腑に落ちたのである⁴³。

確かに日本の教育現場で〈相対主義〉教育が拡大してきた事情はわかる。欧米の個人主義は本来、個人と個人とがしっかりと対立し、そこからボトムアップで社会を築いてゆくはずのものである。日本の文化、特に学校文化と根本的に対立し、両立不可能であるように思われがちである。そこで日本では〈個性〉を内面化し、外面的には協調、一致団結を基調とする教育を温存することによって問題を解決してきたのである。しかし、このやり方は二重の不幸を生んだ。まず、集団主義においては、「先生」や「リーダー」の権威が失墜し、集団の秩序が不安定な「多数派」、「空気」に支配されることになる。この延長線上に現代日本型の「いじめ」があると思われる。他方においては、欧米の〈対話〉型（少な

⁴¹ 2014年5月1日「哲学通論」に対する学生Y.K.のリアクションより。

⁴² 同授業に対する学生T.U.のリアクションより。

⁴³ 2014年5月8日「哲学通論」に対する学生S.N.のリアクションより。

くとも「討論」型）個人主義が内面化され、対決・法度の〈孤立主義〉、〈相対主義〉になってしまった。お上に依存しない本来の個人主義においては、枠がない分、個人と個人とが濃密にかかわりあい何とか社会を形成していくというやり方が採られねばならないはずなのに、逆に、個人個人は孤立化されることになったのである。その結果、外面的に他者と協調・同調（したふりを）することだけが社会性と感じられるようになり、自身が信じる価値観や〈真理〉を共有するという意味での社会性に対する忌避が蔓延したのである。これが若者の間での〈相対主義〉的な思想傾向の強まりの背景である。同時に、〈内閉的な本当の自己〉と〈外面的・社会的に同調する自己〉との分裂は、〈本当の自己〉と〈社会〉との分断をも惹き起こし、〈社会〉に位置づけられず〈自尊心〉をもてずに心を病む若者が増えてきたと思われる⁴⁴。

5 理性の事実と思想の自由

さて、以上で近年の学生の〈相対主義〉的傾向の背景は理解できたが、この現状において大学の哲学教育においてできることは何であろうか。まずは、上で見たような近年の学生の〈相対主義〉的傾向の分析を学生とともに行なうことではないだろうか。できるだけ学生個人を追求することはやめて、欧米の相対主義論争から〈対話〉を始めれば、何とか受け入れられるであろう。その上で、特に哲学教育として最初に取り組んでおきたいことは、〈真理〉や〈善〉というものの存在を、ほかならぬ学生自身が既に前提していることに気づいてもらうことと、私たちに課せられた〈自由〉とはどういうものを自覚してもらうことであるように思われる。

〈真理〉を探究する〈対話〉を充実させるためには、否定されることを恐れずに、面子や体面にこだわらずに積極的に発言していく必要があることは理解した時点で、「しかしそもそも、そうまでして普遍的真理を追求する必要はあるのか？」という疑問を提示する学生が必ずいる。それどころか、前節でも見たように、「そんな真理などそもそも存在しないのではないか？」と受動的なスタンスから見下したように語られることが多いのである。もちろん、この姿勢が、多様性を認めない独断的な真理論に対する警戒であるなら、望ましいことでもある。しかし、少なくともニーチェですら前提していたであろうレベルでの〈真理〉ないし〈善〉というものを自分自身の問題として自覚してもらうことは、〈対話〉を充実させるために必須であるように思われる。

例年、カントの「純粹実践理性の事実」の思想をわかりやすく例示したトマス・ネーゲルの「傘を盗られたことを憤る」という事実の分析を通じて、この自覚を促している。傘を盗まれた時の「憤り」は、単に傘が壊れて使えなくなったときの「イヤな感じ」とは異なる。盗んだ相手に対する「彼はこのようなことをすべきではなかった」という思いが含まれているからである。しかし、あなたは彼のことを知らず、彼もあなたのことを知らないわけだから、この思いは、「このこと〔傘を盗むということ〕は、すべての人がすべての人に対してすべきではないことである」という内容をもつものであることになる。ここ

⁴⁴ 拙稿「個性のつくりかた 社会のつくりかた」（「つくばスチューデント」通巻570号、2006年、7頁）参照。

に、このような憤りを感じる人は、一つの普遍的な〈善〉を前提しているという事実が明らかになる⁴⁵。ここで注意しておくべきことは、「憤り」の〈感情〉という誰もが実感しやすい事実を手がかりとしながらも、「イヤな感じ」とは区別されたこの感情を惹き起こす根拠として、あくまでも〈理由〉ないし〈理性〉（すべきでないことだと認識する能力）の存在が浮き彫りにされている点である⁴⁶。

もちろん、この時点では、「傘を盗まれたことに〔普遍性要求をする意味では〕憤らない人もいる⁴⁷。すべての人間が憤ることなどない」と言って、問題を、受動的に観察できる客観的事実として証明できないという話へ（おそらく無自覚に）すりかえる学生は多い。しかし、ここで問題にしている事実、あなた自身にとってどうかという問題であって、他人がどう思うかはさしあたり関係ないのである。（科学的な意味で）客観的にすべての人にこの事実が認められているかどうかはどうでもよい。でも、あなたにとっては「すべての人がなすべきではない」ことなのだから、そう思わない人を放っておいていいわけではない。（対話）をして説得する（あるいは、自分が思い直す）必要がある。

この〈理性〉の事実の確認においては、さしあたり、何が「すべての人がすべての人に対してしてはならない」ことかは重要ではない。人によって異なってもかまわない。けれども、人が人に対して行なうふるまいのうち、何か一つぐらいは「理不尽」だと言うことが誰にでもあるのではないか。世の中で人が人に対して惹き起こしたどんな非道な出来事、悲惨な出来事に接しても、全く憤らず、すべては自然現象であって「然るべくして自ずから生じたのである」と言って達観していられる人はおそらくいないのではないか。そうだとすれば、これらの人は何らかの普遍的な〈善〉を信じているのである。そして次の段階としては、普遍的な〈善〉とは、「すべての人がすべての人に対して～」という最も普遍性要求の強いものであるのだから、人によって「何がそれである」という意見が異なっているのをそのまま放置したままでよいわけがないということになり、〈対話〉が必須となるのである。もちろん、あらゆる出来事を自然現象だとしか考えない人が居てもかまわない。なるほど、その人は〈対話〉の相手とはならないであろう。でも、それはあなたの事実にとっては関係ない。

ギルバート・ハーマンは、「他人の行為を非難することができるためには、暗黙の合意が存在しなくてはならない」という定式に直すことによって、論理的に自己矛盾しない

⁴⁵ Cf. Thomas Nagel, What Does It All Mean? A Very Short Introduction to Philosophy, 1987（トマス・ネーゲル『哲学ってどんなこと？—とっても短い哲学入門—』昭和堂、1993年）、p.64ff. 拙稿「幸福と自尊心——カント倫理学と現代——」（筑波大学人文社会科学研究所哲学・思想専攻『哲学・思想論集』第37号、2012年、80頁以下参照）。

⁴⁶ 「個々に異なる感受性や普遍化できない習慣や経験は正義の存在理由にならず、その理由として問題なのは憤りの感情を引き起こした理性であるということもよくわかった。何か仕打ちに対して理不尽だと思ふ背景には、その仕打ちを正義と照らし合わせた結果が必ずあり、それが理にかなっていないと判断するから不快に感じるというわけだ。「人にされたらイヤなことは・・・」は誰しも感じ方が同じであるという前提に立つため、人権侵害になりかねないということにも納得がいく」（2014年5月29日「哲学通論」に対する学生A.K.のリアクションより）。

⁴⁷ 実際、筆者の以前の勤め先の学生の多くは、傘をもっていくのは「シェア」であって「すべきでないこと」ではないと主張した。

「洗練された相対主義」を唱えた⁴⁸。確かに、全く異質な爬虫類エイリアンに対しては、「逃げる」だけであって、「非難」はしないだろう。しかし、凶悪な性犯罪者について、「人間ではない。獣です!」と叫ぶ女性も、(もちろん、気持ちは重々わかるが) 犯人を告発する権利を放棄しなければならないのである。〈理性〉(の事実)をもつ者だけを告発することができる。だから、彼を告発したいのであれば、彼を〈理性〉をもつ存在として認めねばならないのである。ここからわかることは、〈対話〉において相手の見解を批判するということは、相手を〈理性〉をもつ存在として〈尊重〉しているということである。サンデルの言う第二の〈尊重〉の意味がよくわかるであろう。誰をどこまでを〈理性〉をもつ存在として認めるかは、あなたの自由である。〈対話〉をしないということは相手を〈理性〉をもつ存在として認めていないということをも意味するが、もちろん、こうする自由はあなたにある。しかし、〈理性〉をもたない存在とした者からは、どんな仕打ちを受けても、そのことに異議を唱えることはできないのである。実際に相手が〈理性〉の事実をもっているかどうかは問題でないことがよくわかったであろう。あくまで、あなたが誰とどこまでの人と関係をもちたいか、社会を形成したいかの問題なのである。

また、あなたが〈理性〉の事実をいかにしてもつようになっただけでも問題ではない。心理学的に、幼少期からの教育・経験によって、そのような〈理性〉の意識が形成されたにすぎないとも考えることはもちろん可能である。単に経験的につくられすぎないのだから、純粋理性の産物とは言えないと主張することすら可能であろう。また、生物学的に、「利己的な遺伝子」(リチャード・ドーキンス)の進化の過程でたまたま一時期に生じた機能が人間〈理性〉なのであって、何ら特別な「意味」も「価値」も本当はもっていないと論ずることも正しい⁴⁹。しかし、これらの科学的な考察はいずれも受動的・観察的という意味での客観的分析にすぎないのであって、ほかならぬあなたの主体的な人生とは何のかかわりもない。何のかかわりもないというのは言い過ぎかもしれない。確かにこうした分析につながりかねない科学的客観的分析というものを日々、参考にして、あなたは自分の人生の選択を積み重ねているからである。しかし、人を信じたり、自分の選択を後悔したりするとき、あなたは自他の〈理性〉(そして〈真理〉ないし〈善〉)の存在を前提しているのであって、そのことを錯覚であると断ずることは、〈自己〉の人生を放棄するに等しいのである。受動的・観察的な意味で客観的な、誰のものでもない視点と、かけがえのないあなた自身がまさに一瞬一瞬選択して切り開いている人生の視点とは別のものである。人として生きるかぎり、後者の視点から完全に離脱することはできない。或る学生の次の指摘はたいへん興味深い。

客観的な目線で見たとつもりになれば、私が普遍だと思っているものは、その普遍性が証明できない以上主観的な普遍性だと言わざるを得ない。しかし実際はこのように考

六〇

⁴⁸ Cf. Gilbert Harman, "Moral Relativism Defended". In *Relativism - Cognitive and Moral*, edited by Jack W. Meiland and Michael Krausz, pp.189ff. ギルバート・ハーマン「道徳的相対主義の擁護」(メイランド、クラウス編『相対主義の可能性』)、356頁以下参照。

⁴⁹ 拙稿「利己主義と地球環境問題」(石崎嘉彦・山内廣隆編『人間論の21世紀的課題——応用倫理学の試練』ナカニシヤ出版、1997年)、236頁以下参照。

えているのも自分であり、究極的には第三者目線になることなどできないのだ。つまり、飽くまでこの（普遍的正義は存在すると考える）“私”にとっては、……普遍的正義が存在していると言えるのだ⁵⁰。

哲学的に言えば、この“私”はいわゆる〈超越論的私〉ということになるだろう。この視点から見れば、科学的な客観性も単なる主観性にすぎない。したがって、今現に〈理性〉の事実を意識しているということだけが重要であって、その意識が（科学的・客観的に）いかにして形成されたかは、あなた自身の人生、〈自己〉の人生にとっては、大した問題ではない⁵¹。

また、哲学や思想を語る場面で前提とされる「思想の自由」ということがもつ意味についても、改めて確認しておきたい。「自由」というと、わが国ではとかく「自分の好きなようにしてよい」という意味にとられがちである。したがって、「思想の自由」とは、「実際の生活においては各人が好きなようにふるまうことは許されないが、思想の上では好きなように考えてよい」という意味にとられかねない。しかし、「思想の自由」が特に認められているということがもつ意味はそういうことではない。「心のなかでは何を思ってもいい」という意味での自由であれば、専制国家においてすら可能である。だから、そういう意味であるとするなら、わざわざ「思想の自由」を認めるということの意味がわからない。したがって、「思想の自由」は、自分の思想を「表明してよい」自由と考えねばならない。

しかし、この「表明してよい自由」は、自分とは違う意見を前にしたときに「自分の意見を表明してもしなくてもよい」という意味での自由をも含むと考えることはできるのだろうか。実際、〈対話〉を促したときに、しばしば「意見を表明するかどうかは自由ではないですか」という意見に出会うことがあるのである。

この問いに答えるためには、「思想の自由」がそもそもどのような経緯で認められるようになったのかを振り返る必要がある。専制国家においても、みずからの思想を表明することは必ずしも不可能ではなかった。しかし、そうした場合、なんらかの圧力を受けること、場合によっては、命を失うことさえ覚悟しなければならなかった。「思想の自由」が認められるようになったということは、こういう「言論の力」以外の圧力・暴力（「黙殺」も含む）によって「思想のもつ説得力」が妨げられないようになったということと理解するべきだろう。つまり、思想に関して「自由」とあるとは、「各人が〈自己〉の〈理性〉を行使することができる」という意味なのである。

⁵⁰ 2014年5月29日「哲学通論」に対する学生 E. T. のリアクションより。

⁵¹ こうした理詰めの説得は一定の成果を挙げているようだ。「普遍的な正義はあるかと最初に問いを受けた時、「ない」と思っていた。それは先生が指摘する通り、自分から一歩離れたところに客観的な「正義」があり、それを追い求めるのだと無意識に思い込んでいたからである。思うに、私は「普遍的」という言葉に惑わされた。「普遍的」なのであるから、科学の自然法則のように観察者（自分）を事象（正義）から切り離さなければいけないと思い込んでいた。だから正義と自分の間に距離をとってしまったのである。しかし実際には違う。むしろ普遍的なのであるから、自分も包括し、なおかつ正義の根本を自分に立脚させるべきだったのである」（2014年5月29日「哲学通論」に対する学生 K. A. のリアクションより）。

しかし、そのことは同時に、私たちが「思想」について「責任」をもつようになったということも意味している。専制国家であれば、「正しい思想」はお上が提示してくれるので、私たちはそれに従えばよかった。その意味では楽ちんだったのだ。私たちには「正しい思想とは何か」に対する「責任」はなかったのである。しかし、「思想の自由」という「権利」を手にしたということは、少なくとも「構成員全員にかかわって白黒つけねばならない案件」、〈真理〉や〈善〉に関しては、「正しい思想」を見つけだす「義務」をも同時に負うことになったということを意味する。

私たちには、〈真理〉や〈善〉に関しては、「自分の意見を表明しなくてもよい」自由はないのである。そもそも、発言しなければ反論されないので、そういう仕方と言論の説得力以外のもので自分の思想を守っていることになる。「思想の自由」は「みずからの思想をそっとしておいてもらえる自由」ではないのである。

サルトルの言葉をもじって言えば、私たちは「自分の思想を表明しなければならない」という意味で「自由の刑に処せられている」と言ってよいのである。こういう厳しい状況に薄々気づいた一部の学生たちは自分の殻に閉じこもってしまう。彼らからは「思想の自由」を剥奪して「優しく」思想を説いてあげるべきなのだろうか。しかし、次のように自覚する学生もいる。

現代日本とは民主主義の国であり、思想の自由が認められている。思想の自由とは「表明した意見を論理によってでなく曲げられることはない」というものだ。意見を表明すると自分の命や財産が危ないのならともかく、そうでないことが一応は保障されているのだから、意見を表明しないことを正当化できる理由はない。……思想の自由が認められるということは、真理に対して平等の権利を持っているということだからである。たとえ誰かが社会にとって有害な感情を持ったとしても、彼がそれを意見として表明し反論に応じるうちに、意見は変わるだろうということ、つまり「人は誰でも真理に近づける」と信じているということだ。この確信があるがゆえに、感受性が違っているだけでは社会から排除されないのである。したがって、「真理を目指す気はない」と言う人は、自分が社会から排除されたとしても仕方がないと認めなければならないのであり、「何に対しても『不当だ』と云いやる権利を失う」ことに耐えねばならないのだ。……ただし日本だと、もしかすると案外耐えることは容易いのかもしれない。共感されやすいように自らの感受性をコントロールするということを身につけている人が多いので、その集団内では「対話なんてとんでもない」という主張が共有性を持っているからだ。だが、そうした「空気をよめば万事うまくいく」というのはただの夢・幻想である。夢なら夢で、私の人生の最後まで責任を持って夢を見せなければいいのに、この集団は、かつての共同体とは違って、そこまで面倒はみてくれない。……もちろん、「感受性をコントロールすれば（いい子にしていれば）社会に参加できていたはずなのに、いきなり『自分の感受性を偽らずに語り合意を目指すことで社会に参加してください』とか言われても困る」という気持ちも抱えきれないほど持っていて、対話を拒むことのほうが多い。だが、「もはや社会と関わるには対話しかない」と言われれば、確かにそうかもしれないと思うようになりつつあるので、対話という考えを認める方向にある⁵²。

6 〈対話〉に対する不安と〈正解〉信仰

以上は、さしあたり大学の哲学教育においてできることであるが、問題を本当に解決しようと思ったら幼少期からの教育のあり方を根本的に見直さなければならない。

〈対話〉が困難になっているのは、〈相対主義〉教育によって〈個性〉が内面化され、〈真理〉の共有が必要でも可能でもなくなったと思いきまされたからだと言った。この点に間違いはないと思うが、同時に、集団主義の変容という事情もあるわけだから、こちらにも注目して考察することができるかもしれない。〈対話〉に対する不安というものを手がかりにして考えてみよう。

まず次の学生のリアクションを見てほしい。この学生は、先に触れたように多くの学生が「普遍的な正義はあると思うか」という問いに客観的事実の観点から受動的・観察的に答えようとした中で、既にその時点で問題を半ば「個人の価値観の尊重」へと読み替え相対主義に賛同する者自身の主観的な心理面について言及した。彼は、人間誰しも自分がもつ「正しさ」の観念を覆されることに不安を抱くものであるが、生まれや育ちが異なる以上、「正しさ」の共有は難しいという現実を指摘した上で言う。

「人それぞれ」という相対主義の考えは現実に即してはいる。しかし、相対主義を採用することで現実の問題が完全に解決されるとは限らない。むしろ、異なる価値観の間の軋轢を深くすることにもなりかねない。たとえば正義についての議論が行われたとき、相対主義は議論から逃げる口実に使われることがある。私が議論の中で「正義は人それぞれだと思います」と言い置けば、私が個人的に思う〈正義〉は誰にも反駁されない。正義について誰がどんなことを言ってきたとしても「まあ、人それぞれだね」と適当にあしらっていただければいい……しかしそれは、自分とは違う考えがあるということの不安や、分かり合えない相手と対話する猥雑さから逃げた横着者の態度である。「自分のもつ正義が本物だ、他人の正義など認めたくない」と思う不安を認めつつ、自分と他人の考えの差異を真正面から考えていくことが、誠実な相対主義の形ではないかと思う⁵³。

⁵² 2010年度筑波大学人文学類「西洋哲学史Ⅱ」に対する学生 M. S. のリアクションより。

⁵³ 2014年4月24日「哲学通論」に対する学生 T. C. のリアクションより。

⁵⁴ しかも彼は、相対主義者のみならず、リベラリストも同根の動機を有しているのではないかという洞察へつながる鋭い指摘をする。「『普遍的な正義は存在する（そして自分もその一部を持っている）』『正義は人それぞれのものだ（だから互いに干渉すべきでない）』という主張は同根である。どちらも、自分にとって今ももっとも蓋然性の高い〈正義〉を変えられたくないがゆえの主張なのではないだろうか。これはたいへん興味深い指摘である。ここで、実はリベラリズムがもつ〈対話〉回避の二側面が見事に射抜かれている。リベラリストは、みずからが「正義」だと考えるものについては「善」と区別して異論の余地がないものとして〈対話〉を拒絶する。そして、彼らが「善」と称して合意不可能と見なすものについても、〈対話〉しても仕方がないものとして、それを回避するのである（サンデルによれば、いずれも〈対話〉すべきものである）。この学生によれば、どちらの回避もみずからの価値観を変えられたくないがゆえのことだということになる。

つまり、自分の価値観が覆されることに不安を懐くが故に、議論から逃げるために相対主義を援用しているというのである⁵⁴。しかし、自分の価値観が覆されることはそれほど不安を与えることなのだろうか。この問題を二つの角度から考えてみたい。

まずもって指摘しておくべきことは、既に前々節の学生のリアクションにも表われていたように、わが国では「個人の価値観の尊重」と「個性の尊重」とが同一視されがちであるという点である。元より、日本人は意見を否定されると人格を否定されたように受け取りがちであると言われてきた。だから、人の意見に対して面と向かって否定的なことを言わないという風潮は昔からある。これは、「個人の価値観」としての「思想」というものと「個人の感受性」や「人格」そのもののとの区別の意識が西洋に比べて希薄であるということを意味する。否むしろ、クラーク氏が言ったように、そもそも日本人には「思想」がなかったと言ったほうが適切かもしれない。西洋的に考えれば、普遍性要求を伴う「思想」というものは他者と共有されてはじめて「思想」なのだから、〈私秘的な思想〉というものはありえない。かけがえのない〈個性〉を表現するのは主として「感受性」である。或るものに対してどう感じるかは、それこそ「人それぞれ」であって、これを尊重する仕方としては、対立する場合はできるだけ「そっとしておく」、「無視する」しかない⁵⁵。しかし、「思想」に関しては、普遍的に共有されてこそ価値をもつのであるから、対立する場合は、どちらがより普遍性をもつか白黒をつけ一本化すべきものである。その際、自分の意見が否定されても人格そのものが否定されたわけではなく、傷つくいわれはないし、むしろ他者と共有できる考えが見つかってよかったと喜ぶべきことである。この区別がないと、自分の意見を否定されることが〈自分のアイデンティティ〉の危機のように感じられ、不安を抱いてしまうと思われる。「自分の意見になかなか自信がもてないので発言できない」とか「確固たる自己がないので発言できない」と

⁵⁵ それにもかかわらず、わが国では、この「感受性」のほうを「共感」（しているふりにならざるをえないと思うが）という形で一つにするように促されるという〈感受性のファシズム〉状態がある。これは〈会話〉重視の姿勢と連動しており、マジョリティにとっては心地よい社会が実現するが、決して本来の意味で〈個性〉が尊重されているわけではなく、社会の片隅で、本来不可侵のはずの〈感受性〉を侵害され、〈人権〉を侵害されていると言ってもよい状態に置かれている人が必ず存在するはずである。「自分がされたらイヤなことは人にもするな」という言葉があるが、これこそは〈感受性〉の押しつけになりかねないということは肝に銘じるべきである。或る学生も次のように言う。「今日の授業で最も印象的だったのは、「人にされたら嫌なことは自分もしない」という日本の文句は、感受性が同じであることを前提とした考えであるということだ。私は、「人にされたら嫌なことは自分もしない」の、どこに問題があるのかまだよく理解できていなかった。自分の体験から考えてみてもこの文句の道徳に納得していた。実は、自分の感受性を押し付けながら、それが正しいと思って行動規範にしていたのだとわかって、衝撃的だった」（2014年5月29日「哲学通論」に対する学生Y.K.のリアクションより）。また逆に、本来共有されるべき「思想」というものが、ばらばらに放置され、どうでもよいものであるかのように扱われていることも問題である。「現代の日本の若者に顕著な例としては、人それぞれの価値観の違いは個性として尊重しようとするが、集団でまとまるために「感じ方」は同調しようとする。そうして、表面上は周囲と同じように感じた風に振る舞うも、内心では自分の価値判断を保持したまま実際には相手を認めず意固地に自分の考えに固執しているのだ」（2014年7月31日学生S.N.の「哲学通論」期末レポートより）。ここから「思想の自由」についての誤解も生じるのである。

いった考え方は誤解である。まずは、「個人の価値観」と〈個性〉との区別（なかなか難しいことではあるが）が理屈の上だけででも周知される必要があると思われる。そうすれば、一つの〈真理〉をめざしても〈個性〉が否定されるわけではないということが理解されるだろう。

そして、他者と異なる意見をもちながら、それを秘めたままだとかえって「どちらが正しいんだろう」と不安になるという点にも注意してほしい。例えば、筆者は、特に教育のあり方に関しては周りの人たちと意見を異にする場合が多いが、そうした場合、自分の意見を公にして反駁されることを望む。他者と意見が対立していることは苦しいものである。反駁されて他者と意見を共有できたほうがよいのである。もちろん、自分の意見が受け入れられればなおよいが、いずれにしても、対立したままよりは納得して一本化できたほうがよいのが「思想」とか「価値観」である点に自覚的であるべきだろう。

しかし、「価値観」を覆されることに不安を抱くということには、もう一つの見方もある。確かに単に個人的な価値観というものはないので、個人の価値観であれば、反駁されても他者と共有できたほうがよいということは言えると思う。しかし、既に価値観を共有している状態にある（あるいは、共有していると思っている）ときに、その共有状態が損なわれることも不安なことであり、こちらの不安は誤解ではなく、現代の世界のあちこちで実際に切実な問題となっているものである。サンデルが注目した「多元的社会」の問題も、そういう類のものである。日本の若者が抱いている不安もそういう視点から考察することが可能であろうか。現代の若者の〈相対主義〉的傾向の原因についての次の学生のリアクションが参考になると思われる。

仮に互いに干渉しあって、自分の考え方は間違っているとの烙印を集団から押されて、のけ者となってしまふことを恐れる心があるからでしょう。仲間はずれを嫌う日本人は、集団の中で間違いだとの烙印を押されることを嫌がります。そのような事態が干渉し合うたびに起こるならば、もうそのような面倒なことはしなくていいだろう、という逃げの考えが生まれてしまったのではないのでしょうか。そのため、他者もそれぞれ自身を正しいと信じて居る、という意見を押し付けることで〔互いに牽制しあい〕仲間はずれになることを自然と避けようとしている若者が増えているため、このような現状になっていると考えました⁵⁶。

ここには、みずからが所属している集団には既に共有されるべき価値観があり、それを自分も共有している状態を維持したいという思いと、そこからはずれることへの恐れ、不安が描きだされている。次の学生のリアクションで語られている「恐怖」も同様のものであろう。

「人それぞれでいい」という考え方の根底には、……集団から排除されてしまふことを恐れる心理がある。集団から排除されることへの恐怖は、現代のいじめが原因なのではないか。少しでもはみ出たらいじめられ、という恐怖の中で育ってきた子どもた

⁵⁶ 2014年5月1日「哲学通論」に対する学生A.Y.のリアクションより。

ちがおとなになったときに、排除されないようにと、下手な言い訳を立てて対話から逃げるようになるのだ。そのため、対話を充実させるためにはまず、いじめの問題を解決していくべきだと思う⁵⁷。

「それぞれの価値観を尊重する」と言いながら、「相互に干渉してはならない」という原理だけでは普遍的であるということを確認したが、実はもっと具体的に集団の中で共有されるはずの価値観というものが想定されているのではないか。この価値観は決して「それぞれ」であることは認められず、「それぞれ」であることが認められるのは、この価値観に表だって対立しないかぎりであるということが、「人それぞれ」の押しつけの中には含意されているということではないかと思われる。

したがって、若者たちが他者に自分の意見を覆されることに不安を抱くのは、〈個性〉と〈個人の価値観〉とを混同している（面もあると思うが）ということだけではなく、共有されるべき価値観に対して徹底的に受動的であって、みずから「思想の自由」を行使できるということ、行使すべきであるということを実は本当には信じていないということも原因なのではないだろうか。

戦後から現代に至るまで、制度的な共同体の抑圧力は弱まり、制度的な枠組みによって人間関係が縛られる度合いは減少してきた。したがって、若者はもっと社会に対して自発的に自由にふるまうてよいはずなのだが、いかんせん、そういう作法を教えてこれなかったもので、縛ると同時に守ってくれるはずの制度を求めて、なおも見いだしうる〈枠組み〉のようなものに強迫的に依存するようになった。昔に比べて授業への出席率がよくなったことは周知の事実であるが、かといって授業内容に熱心に取り組むようになったかという、そうは思えない。推薦図書をちらっと挙げて読む学生は依然よりも減っている。全員参加を義務づけられた行事には、内容にかかわらず不満も言わずに参加するが、各人それぞれにふさわしい自由参加行事があっても参加は稀である。とにかく、皆からはずれないことが第一の行動指針であって、そのための〈枠組み〉に依存的・受動的な傾向が見られるのである。筆者が努めて各人が自分で判断せざるをえない状態をつくりだすと、ひどく嫌がられる。かつて私たちを律してきた〈世間〉は壊れてきているのに、代わりに流動的で不安定な〈空気〉⁵⁸が支配力を増してきているのも、そうした事情からである。

大人たちがイメージするコミュ力とは、多種多様な人間たちと理解しあえる能力とか、自己表現を巧みにできる能力かもしれませんが、子どもたちにとってのコミュ力とは、じつはそういうものではなくて、場の空気を敏感に察知して自分だけが浮かない能力とか、場に合ったキャラを巧みに演じ分けられる能力なのです⁵⁹。

⁵⁷ 2014年7月31日学生 M.S. の「哲学通論」期末レポートより。

⁵⁸ 鴻上尚史『「空気」と「世間」』（講談社現代新書、2006年）によれば、今流行の「空気」は「世間」が壊れて流動化したものである。

⁵⁹ 斎藤環＋土井隆義「若者のキャラ化といじめ」（2012年『現代思想12月臨時増刊号（第40巻第16号）緊急復刊 imago いじめ学校・社会・日本』）、28頁。

同様のことを別の言い方で表現すれば、〈真理〉ではなく〈正解〉を求める傾向が異様に高まっているとも言える。「最近の若い人は受験等の影響もあって〈正解〉を求めてしまうから、答えがはっきりしない哲学には馴染みにくいんだ」というセリフはよく聞いていた。しかし、そのこと〔〈正解〉を求める傾向〕が〈真理〉を探究する哲学にとってそれほど障害になるとは思っていなかった。〈正解〉を求めたいという気持ちがあるのであれば、当然〈真理〉の探究にも関心があるはずなので、あとは「簡単ではないが、がんばろう」と背中を押してやればいだけだと楽観的に考えていたからだ。

ところが、学生たちに「それは違う。〈正解〉を求めることと、この授業でよく言われるような〈対話〉を通して〈真理〉に迫る営みとは、むしろ正反対の事柄かもしれない」と指摘を受けた。「何が正解か」は既に決まっており、いわば閉じている（だから、必ずしも〈対話〉を必要としない）のに対して、〈対話〉を不可欠とする〈真理〉の探究は、どこまでもオープンで常に暫定的でしかない。〈正解〉は、何らかの〈権威〉のもとにあるからこそ閉じることが可能なのだが、だからこそ、〈正解〉の〈責任〉は〈権威〉の側にあり、〈正解〉を得た者にとってそれは見えやすい形で有用であり、彼に分かりやすい利益をもたらす（例えば、大学に合格できる、よい成績がもらえる）だけであるが、それに対して、〈真理〉の探究は、その〈責任〉が探究者自身に重くのしかかるものであり（もちろん、そのぶん〈自由〉もあるのだが）、精神的不安を与えこそすれ、何の得にもならないかもしれない代物である。もし分かりやすい利益を獲得することが前提であるのであれば、そもそも〈真理〉の探究に関心など抱くはずもないのである。自分が〈真理〉だと思ったことと違っていても〈正解〉に〈同調〉するのが、賢い選択であり、同調先が見つからなければ途方にくれるだけであるというのである。

そう言えば、いくら「正解があるわけじゃないから、私の答えを覚えたって意味ないだよ」と強調しても、明確な答えが与えられないと不安で仕方がない様子がうかがわれる人がいる。そういう人にかぎって、他の学生の発言はまともに聞いていないし、みずから責任をもって意見を言おうともしない。〈正解〉の呪縛から脱することができないのであろうか。また、逆に「哲学には〈正解〉はない」と積極的に唱えるが、自分の意見に固執するだけで、十分な議論を積み重ねようとはしていないように見える人がいる。あるいは、議論を詰めてゆくと「そもそも皆が共有できる〈真理〉などないのだ」という一点にすがりつく場合がある。学生たちの指摘によれば、こういう人にとっては「〈正解〉はない」と言うこと自体が自分にとって有利な〈正解〉なのであり、「そもそも〈真理〉がない」というのは反論を買わない万能の〈正解〉なのではないかと言う。どこまでも〈正解〉にこだわっているからこそその振る舞いかもしれないというのである。

確かに、そこまで〈正解〉信仰が浸透しているのであれば、〈対話〉の営みは容易ではないであろう。とくに、「〈正解〉はない」、「〈真理〉はない」という〈正解〉にとらわれているとすれば、この防護壁を突破するのは容易ではない。こうした〈枠組み〉依存・〈正解〉依存の傾向はなぜ強まってきたのであろうか。先に見た学生が「いじめ」に言及していたことを思い返してほしい。

7 脱〈つながり〉教育へ向けて

土井隆義氏の近著『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』⁶⁰を読んでいると、最近になって子どもたちにおける〈自己〉と〈社会〉との分断の病は一層深刻さを増しているように思われる。氏の十年前の著作『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える』においても、孤立した〈個性〉が煽られる中で、子どもたちは、そういう孤立した〈自己〉への不安から、周囲の身近な人間に絶えず〈承認〉を求め、過剰に配慮・同調してしまう姿が鮮明に描き出されていた。表面的な対立は決してあってはならない、「浮いたらオシマイ」という強迫観念に衝き動かされている以上、表立って対立する〈対話〉が困難であるのも当然であると筆者も納得していた。そして、この表面的に同調する〈自己〉と内閉的な〈個性〉をもつ本当の〈自己〉との乖離に気づいてもらって、同調を緩め、本当の〈自己〉を他者に開放してもらうことによって、この乖離を解消してもらいたいと願ってきた。

ところが、以前は集団同調型の教育の解消を怠ったまま無責任に〈個性〉を煽って、子どもたちを存在不安に陥らせていた教育界は、〈相対主義〉教育を見直し、集団主義の解体、〈個性〉の社会化を促進して〈対話〉教育を充実させるところか、なるほど〈個性〉を煽る勢いは弱まったものの、逆に〈つながり〉と称して従来型の集団主義の復古を計る流れになっているように思われるのである。以前には「自分探し」が言われたが、今は「友だち探し」が主流の時代である⁶¹。もちろん、欧米型の「個人」という観念を完全に払拭することができてトップダウン方式で「厳しく」子どもたちを「指導」していくことが可能であれば、このような形で若者の社会性を再構築する方途も一つの選択肢ではある。しかし、グローバル化した世界において日本だけが孤立的にそういう道を歩むことは困難であろう。実際、欧米の「個」を否定することはなしに「優しく」子どもたちを「支援」という形で集団化・同質化を煽っているのが現状であるように思われる。これでは子どもたちは反発すらできず、ますます自律的なジャイロスコープを失い、「空気」に支配されながら閉じた〈自己〉を温存することになる。

土井氏に聞いたところでは、近年、或る中学校で「友だちから言われて一番イヤな言葉は何か」という質問に圧倒的多数の子どもが「個性的」と答えたそうである。これは、「〈自己〉とは、秩序だった共同体によって与えられる役割や責任を担ってはじめて〈自己〉であり、そこから独立の〈個性〉などない」という以前の日本社会の考え方に子どもたちが立ち返っているということを意味するのであろうか。それはありえないと思われる。そうではなく、もはや他人と同じ平面上に（本当の）〈自己〉を捉える視点自体が消失し、いわば垂直方向へ超越して神の視点から社会を見ているような状態なのではないだろうか。平面上にある〈自己〉はキャラ⁶²を演じる対象化された〈自己〉であって、それを見ている本当の〈自己〉とのつながりを失い始めていると思われる。もはや、〈同調する

⁶⁰ 岩波ブックレット、2014年。

⁶¹ 同書71頁参照。

⁶² 土井隆義『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット、2009年参照。

自己」と〈内閉的な本当の自己〉との分裂意識すらもなくなり、〈本当の自己〉が〈社会〉化する道そのものが消失しつつあるのかもしれない。こうした傾向の背後に見え隠れするのが〈いじめ〉に対する恐れ・不安である。

これまで、いじめ問題がクローズアップされるたびに、大人たちは道徳教育を充実せよと叫んできました。そこで重要な徳目の一つとして挙げられるのが協調性です。「お互いに協調しあって、仲良くしなければならない」というわけです。しかし、子どもたちにしてみれば、この協調性という言葉は、しばしば用いられるいじめの口実の一つにはかなりません。「いじめられても仕方ない。だって協調性がないのだから」というわけです。けっして周囲から突出してはならず、協調しあいながら摩擦を避け、仲良し関係を営みつつなければならない。そういった過剰な同調圧力こそ、今日のいじめの根底に潜んでいるものです。だとしたら、そんな徳目は、いじめ問題を解決するどころか、むしろ逆に深刻化させていくだけでしょう。一致団結のような熱いつながりの強要は、かえっていじめの土壌を育んでいきかねないのです。……そのことを自覚しておくべきなのは、教師や親だけではありません。日本人みんながそう自覚すべきです。なぜなら、新自由主義が浸透するなかで無縁化の不安に駆られた人びとが盛んに口にするようになった「絆の大切さ」という聞こえのよい言葉にも、あるいは東日本大震災後に復興のスローガンのように唱えられてきた「日本はひとつ」「つながろう日本」といった勇ましいかけ声にも、まったく同じ「場の倫理」を読み取れるからです。「個の倫理」を圧殺しかねないこれらの言葉に対して、いったいどれほどの日本人が違和感を表明しえてきたのでしょうか⁶³。

従来、日本社会は「恥の文化」というものをもち、「同じ共同体に属する人々の視線に規律されること」がモラルであった。「まわりの人がよかれと思うようにふるまう」仕方、家族や村の人々が悲しまないように「恥」にならないようにふるまう仕方ではモラルは維持されてきたのである。こうした「郷に入りては郷に従え」的態度は、共同体によって維持されているわけだから、「旅の恥はかき捨て」と裏腹であるが、かつては共同体の範囲がそこそこ広がったので、日常的な生活集団の間ではモラルが維持されていたのである。

ところが最近では日常的にも若者の「恥知らず」なふるまいを目にするようになった。これは彼らが従来型のモラルを失っているということを意味するのであろうか。そうではない。彼らは従来のモラル的な態度を或る意味で徹底しているのである。以前と違う点があるとすれば、彼らが意識できる共同体の範囲が狭くなっていて、仲間集団の外側のまなざしに鈍感になっているということだけである。かつては「旅」は非日常であったが、インターネットほかであらゆる異質な価値観に触れ続ける今では「毎日が旅」であり、「仲間以外は皆風景」とでもいうべき感受性がある。若者の傍若無人なふるまいは、あくまで「近

⁶³ 土井隆義『つながりを煽られる子どもたち』81頁以下。ただし、「場の倫理」と「個の倫理」の対立というよりは、「受動的に一つにまとまることを強いる倫理」と「内発的に合意をめざす（〈対話〉的）倫理」との対立、あるいは、「正解を受け入れる倫理」と「真理を探究する倫理」との対立と見たほうがよいであろう。

接する隣人たちから同質的な存在として受容されているという安心⁶⁴、「自分と周囲が違わないことによる安心⁶⁴」がもたらす「近接的確かさ」を支えとするものなのである。逆説的だが、モラルの荒廃は、従来のモラルが徹底されることによって進行しているのである。共同体の細分化、島宇宙化と同時に流動性も高まっている。かつての日本には若者が共有できる前提がたくさんあったが、現在では文化の多様性・流動性の故に、偶発的に不快でないものを選ぶしかないような状況がある。だから、仲間関係を維持するためには、ヘタに腹を割るとノリが壊れて一緒にいる理由がなくなってしまうので、臆病なほどノリの同じさを壊さないように心がける希薄な関係に変わってしまっているのである⁶⁴。したがって、土井氏が『〈個性〉を煽られる子どもたち』の副題に挙げた「親密圏の変容」、すなわち、親密な相手ほど素直な想いをストレートにぶつけることのできる相手ではなく、まず相手との関係性を優先し、その維持のために自らを装わねばならない相手になった⁶⁵という指摘はまったく納得のゆくものである。

やはり、土井氏が監修した2010年4月23日のNHK特報首都圏では、昼休みにトイレにこもって食事をする「便所飯」が紹介されていた。一人で食事すること自体がさびしくて嫌なわけではない。「一人で食事をする、友だちがいないさびしいやつ」と身近な人たちに思われることがあってはならないことなのである。身近な者とのつながり（外面的な）が何よりも大事であると強迫神経症的に追い詰められている様子がよくわかる現象である。

関係を維持するための仲間集団内の「同調圧力」(peer group pressure)は、われわれの時代とは比べものにならないほど高まっており、また、この圧力はかつての「世間」のような安定して秩序だったものではなく、流動的な「空気」のようなもので、いつ流れが変わるかわからない。かつてから日本の社会は、集団の秩序維持のために、「いじめ」や「村八分」を必要としていたが、その伝統は若者にもしっかり受け継がれ、関係の脆さを補うために(種類や程度は様々であろうが)〈いじめ〉がほとんど不可欠なものとなっているようである。しかも、集団を律する〈空気〉は流動的であるから、いじめの対象は次々変わらざるをえない。鴻上氏が「順番に来るいじめ」⁶⁶と呼んだゆえんである。大概是、いわゆる「いじり」と区別がつかないので、加害者意識もないことが多く、集団からはずされる恐れ・不安を常に全員が抱いているので、加害者も被害者も特定困難である⁶⁷。

若者たちの〈相対主義〉的思考傾向がかつてないほど強まっている根底には、こういう日常がある。昨年度にも、「先生の言うことはそのとおりだと思うし、〈対話〉したいとも思っているが、これまでの学校生活の中で常に〈いじめ〉に怯えてきたので、体が〈対話〉についてゆかないんだ」という趣旨の指摘を受けた。〈いじめ〉の対象にならないように絶えず周りから浮かないように細心の注意を払う。いじめられることを避けるためには、みずから積極的に同質化運動の中心となり、浮く者を糾弾しさえする。そんな悪循

⁶⁴ このあたりの分析は、宮台真司氏の論考を参考にしてかつて作成した拙稿による。「自己決定論ノート」(『比治山大学現代文化学部紀要』第5号、1998年)、43頁以下参照。筆者は現在ではもう「自己決定論」を肯定しない(教育のプロセスの中では有用な場面もあるだろうが)。価値の共有がどうしても必要である。

⁶⁵ 土井隆義『〈個性〉を煽られる子どもたち』4頁以下。

⁶⁶ 『「空気」と「世間」』16頁。

環が勢いを増していることが、若者たちの間で〈相対主義〉を活気づけ、〈対話〉を回避させ、普遍的〈真理〉に対するさげすみを惹き起こしているのである。

こうした若者たちの現状にさらに拍車をかけているのが、土井氏も指摘するように、教育現場での〈つながり〉教育であるように思われる⁶⁸。〈つながり〉を煽ることが、一見逆説的だが実は必然的に、〈いじめ〉が日常化した〈排除型社会〉を生み出しているのである。今は〈つながり〉が内向きなので、決して和が大きく広がっていくことはない。大人はこのメカニズムを目を見開いて見据えるべきだ。みずから生まれ育った価値観を温存したまま若者を導こうとしても、状況が違うことを肝に銘じなければならない。内閉化した〈個性〉を煽って本物の自己主張を抑制し、〈相対主義〉教育によって〈真理〉に対する信頼を剥奪し、「みんな正解!」と言いながら、〈正解〉の枠からはずれる恐れを植えつけた（もちろん、教師たちに悪気はないと思うが）あげくに、今は〈つながり〉を「優しく」⁶⁹「支援」して（場合によっては〈いじめ〉の温床を提供し）反発の機会すら奪って自律を徹底的に抑制してしまっているのが現代の状況ではないだろうか。

⁶⁷ こうしたコミュニケーション操作系いじめの温床は、学校の「クラス」に代表される中間集団全体主義であると指摘する社会学者の内藤朝雄氏は、今すぐできる即効性のあるいじめ対策として学級制度の廃止を提唱する（『いじめの社会理論』（柏書房、2001年）、「学校リベラリスト宣言」（宮台真司・藤井誠二・内藤朝雄『学校が自由になる日』（雲母書房、2002年）所収）、『いじめ学』の時代』（柏書房、2007年）、『いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか』（講談社現代新書、2009年）参照）。いじめを見抜き適切に対処できるスーパーマン教師の量産や本稿で提唱してきたような若者の意識改革に比べてはるかに現実的で実効可能な策であるが、日本の学校の管理者側からは、管理のしやすい既得権益としてのクラス制度を手放すことには相当な抵抗が予想される。わが勤務先にも開学以来クラス制度が存在するが、近年、若者に対する心配から、その役割がより強化される傾向にある。本稿から明らかのように、この方策は本当は現状に全くそぐわないものである。

⁶⁸ 表象精神病理学者の斎藤環氏も言う。「学校教育における徳目の一つとしての「協調性」教育も問題ですね。協調性というものの過大な重点化が、実際にはいじめのロジックを強化してしまう面があるように思います」（斎藤環+土井隆義「若者のキャラ化といじめ」、35頁）。

⁶⁹ 「学生に否定的なことは言わないことにしている」と公言する教師もいる。土井氏は、「とくに生徒たちと年齢の近い若手の教師には、……乗り越えるべき壁として生徒の前に立ちただかつてみせるのではなく、むしろ生徒と同じ目線に立ち、その仲間の輪のなかに入り込むことで、円滑な学級運営を実現していこうとする教師が増えている」（『つながりを煽られる子どもたち』64頁）ことを問題視している。こういう態度は、教師自身がいじめのピースになってしまう危険を孕むばかりか、うまくいっても生徒を反発すらできないほど囲い込んでしまうことになり、生徒の自律する活路を断つことにもなりかねない。今、学生たちに促すべきことは〈対話〉であるが、そこまで行かなくてもせめて〈反発〉させることが必要であって、優しく導くことではないように思われる。また、あれほど質問や意見はオープンにみんなの前で話してほしいと言っても、あえて授業中には言わず、授業が終わった後や研究室に個人的に質問に来る、来ようとする学生が跡を絶たない（このことは、今の教師はみんな知っているはずだ）が、大抵、ほんの少し意見を言ったあとは黙って筆者が優しく教えてくれることを享受できることを期待した姿勢になる（もちろん、人によるが）。「よしよし。よく来たな」と頭を撫でてくれて自分だけに特別なことを教えてくれるはずだ、それが当然だと思い込んでいるように見えてしまう。これも、これまでの教師の接し方の問題だと思われる。すっかり受動的・享受的な姿勢が身についてしまっている。だから、筆者は「遠慮なく研究室に質問に来てください」とは言えなくなってしまった。あえて教室で、あるいは、公開リアクション・ペーパーで述べるように促している。

最近では大学においてすら、学生たちを一人で行動させず、集団で支援する動きが強まっている⁷⁰。こうしたやり方では、人間関係の病は悪化しこそすれ、改善することはない。そうではなく、むしろ普段は一人で行動することが強いられるような環境を用意すべきであろう。そして、そのかわり教室では、積極的に〈対話〉を促し、不安定な〈空気〉を読むことによる表面上の協調による〈社会性〉ではなく⁷¹、〈自己〉の価値観（〈真理〉ないし〈善〉）を真に納得して他者と共有できるようにする仕方で、他律的ではない自律的な

⁷⁰ 教育学者の齋藤孝氏は『若者の取扱説明書——「ゆとり世代」は、実は伸びる』（PHP新書、2013年）において、現代の若者の気質をよく見抜いて、「自分だけ取り残されたくない」という気持ちを利用したり、チームを組ませて同調圧力を加えたり、褒めることによって、学生たちを動かす術を紹介している。確かに、こうすることによって目先の成果が上がることはわかる。しかし、彼らの依存心を肯定してしまっているのではないかという疑念が残る。ずっと彼らを導いてくれる存在が居続けるとはかぎらないのに。

⁷¹ 西洋人にとって「よい」とは「欲求される」ということであるから、自分が欲するものの延長線上に「善」はある（はず）である。したがって、「悪だと知りつつ悪を行なうことはできない」というソクラテスの主張は特異なものではないということを描すると、大部分の学生が驚く。善に対して徹底的に受動的であって「善とは自分の外部から与えられ従うだけのものだと思ってきた」というのである。或る学生は言う。「西洋のよいことは、……自分が何を欲するか中心で考えられている。対して、日本の善は世間の目を中心に考えられていると思う。何をすれば周りのひとが褒めてくれるか、何をすると世間のひとから咎められるか。あくまで自分の考えを抜きにして考える。ということは、周りにひとがいなるときは善を気にしなくて良いということになり、普遍的な善とはいえない。善は普遍的であることが対話の前提であるのに」（2014年5月15日「哲学通論」に対する学生Y.S.のリアクションより）。また別の学生の指摘もおもしろい。「西洋の人々が話すのを見てみると、「自分勝手だなあ」と思うことがある。たとえば、トラブルになった二人をそれぞれインタビューすると、お互いが自分の言い分を主張しており、どちらも譲る気がないのが伝わってくる。そのため、「西洋人は、自分が認めたものしか善と認めない」というのにも納得できた。私が自分勝手だと思うのは、「物事にはみんなルールがあるのに、あの人たちはそれを無視している。」と感じるからだと思う。そのルールは、私が自分で考えた個人的なものではなく、みんなが守るようにと定められている社会の決まりや法律などである。……全体の協調をはかるのだから、ただの個人にすぎない自分の自由が制限されることもある。海外では、暴動を起こしたり、ストライキを起こしたりして、政策に反対したり要求を通そうとする様子が見られる。しかし、日本では、何かに気に入らないことがあったとしても、大抵は、「もう決まっちゃったことだから、仕方ないか。」と諦めてしまう。上が決めた通りにしていれば、まず社会から追いつめられることはないからである。しかし、ただ協調をはかって外面だけでもまともな社会は、真の社会とは言えないし、そんなところで通用する道徳は、本当に理に適ったものではないと思う。決められたルールをそのまま鵜呑みにするのではなく、いったん立ち止まり、自分はどう思うのかをはっきりさせることが必要だと思う。そして、自分の心の中にとどめておくのではなく、積極的に周囲へ意思表示するほうがいいのではないかと思った」（2014年5月15日「哲学通論」に対する学生H.A.のリアクションより）。そして、日本人は「善を自分で考えるという主体性に欠けている」と指摘する或る学生は、「善に関する無知」をめぐって言う。「赤ん坊ではないのに無知であるという人は、誰にも無知から脱する機会を与えられなかったのではないか。日本では、「世間ではこれこれこういうことが善くてこの逆は悪いとされています」という処世訓めいたことを押し付け覚えさせる道徳教育が行われているが、これでは生徒の誰も無知から脱することはできない。「何が善くて何が悪いと思うか、自分で考えてみなさい」と促し、その意見を表明させ、普遍的な真理に近づけるよう指導するのが、無知を除き知を与える教育である。このような教育を受ける機会は、日本ではそうそう得られないように思う。しかし幸運にも「自分なりに考えて無知を脱することを促される」という機会を得てもなお、自分で考えたのでもない一般論に納得したフリをしたり、誰かの考えを無批判に受け売りしたり、考えること自体を放棄するということがあるなら、その人は無知

〈社会性〉をとともに築きあげてゆけるようにすべきである。協調しないからといって、「ひとりぼっち」になるわけではない。コミュニケーション能力とは、具体的で身近な他者と表面上うまくやる能力ばかりではない。〈対話〉をする姿勢さえあれば、世界中の理性をもつ人たちとつながっているのであり、〈対話〉できるということは、より広がりを持ち客観的な確かさをもったコミュニケーション能力である。現代社会においては、こうしたコミュニケーションを通してこそ、〈自己〉は〈社会〉に安住でき、〈自尊心〉を取り戻すことが可能だと思われる⁷²。

〈正解〉を求め〈真理〉を忌避する現代日本の若者たちは、われわれの世代の日本人と比べても社会的なものに対して徹底的に受動的で享受的である。大多数は表面的には必ずしもひきこもっているわけではなく、仲間と思える者たちとなら、イベントにも積極的に参加するが、それがいつも内向きなのである。〈個性〉神話が内向きにさせ、〈つながり〉依存が従順さを要求するので、相乗作用で受動性が強いられているのである。しかし、彼らにかつてあったような安定した「世間」を提供することはもはやできない。そうであるかぎりには、「恥の文化」方式でモラルを再生することも、彼らに既存の共同体に依存する

に安住しているといえる。この「無知であるだけでなく、知ろうともしない」人こそ、許されるべきではない。今までの講義であつたように、それは面倒な事は避けたいとか、他人から変に思われるのが嫌だとか、独りで密かな優越意識に浸りたいとかいう束の間の利己心のために、普遍的な真理のすべてを犠牲にすると「選択する」ことだからである。知らないことが罪なのではない。知ろうとしない、考えようとしないことが罪なのだと思う」（2014年5月15日「哲学通論」に対する学生T.C.のリアクションより）。

⁷² 経済学者の田中洋子氏は、幕末・明治以来の西欧列強諸国に対するキャッチアップの緊張感、また1930年代後半の準戦時体制から敗戦後に引き継がれ、戦後の高度経済成長を支えた、貧しさからは上がるというキャッチアップの緊張感が、1970年代中葉から1990年代初頭にかけて「世界モデルとしての日本論」が現われることによって日本社会から失われ、日本人の価値観を動揺させたと言う（『ポスト・キャッチアップ時代の混迷構造——『働く』『学ぶ』『憩う』価値の歴史の変質と崩壊——』（駒井洋編著『日本の社会知の死と再生——集団主義神話の解体』ミネルヴァ書房、2000年）、3頁以下参照）。学校にあっては、かつてあった競争的、切磋琢磨の要素が現場の前面から退かされ、平等性が優先的に尊重されるようになった。みなと同一でなくてはならないという集団主義的な同一化圧力と、そこから突出してさからう者を厄介な「問題児」として見る方向性を学校ぐるみで生みだし、このことがこうした「村八分」的ないじめをなんとか避けようとする指向性を新しい世代の生徒たちの中にもたらすことになったというのである。「ここでは人間関係が自分の生活と意識にとって過剰なまでに中心になっているにもかかわらず、それが過剰になればなるほど逆に実質的な人間関係はますます希薄になっている。傷つくこと、傷つけることを敏感におそれて、正面きつたトラブルや議論は避け、表面的な共通の話題に逃げ込み、ちょっと雰囲気が悪くなるとすぐみんなで「フォロー」しあう」（30頁）。しかし、求めている心の「安らぎ」が得られるとはかぎらない。「言葉としての伝統的・集団的価値規範はなお人々の思考をしばっているにもかかわらず、それを支えている実質的な現実の基盤が足元から崩れていく過程が進んでいるのである。価値は現実には裏切られつつある。にもかかわらず、日本社会はなおそれに代わって社会や人々を引きつけ、新しい価値観を探しあぐねているように見える」（51頁）。田中氏の論考では本稿よりも歴史的経緯に注意が払われており、参考になる。いずれにしても、近年において教育が若い人たちの間の「同調圧力」を高めてしまっている現状があり、それが問題であるという点では、本稿と一致した見解が見いだされる。また、経済の問題、ことにグローバル経済の問題は、わが国のみならず世界を視野に入れてこの問題を考える上で欠かせない視点であろう。

形で〈自尊心〉を取り戻してもらうこともできない。そうであるならば、どんなに困難でも発想を根本的に転換せざるをえないのではないだろうか。若者たちの未来のために大人自身が身を切る覚悟でみずからの価値観を見直さなければならない。自分たちにとって居心地のよい穏やかな社会を温存するために彼らを犠牲にしてはいけない。なぜ若者たちが徹底的に受動的なのかと言えば、「個性の尊重」と称して他者への批判・干渉を禁止してしまったために（これは教師に対する反抗の禁止でもある）、欧米のように個人と個人が濃密にかかわりあって社会をつくることができず、集団の行動指針として何らかの枠組みが与えられることを待望せざるをえないからである。自分では動けないので、権力者や多数派に従うしかない。〈個人〉の〈個性〉を尊重する教育がいつそう自主性を奪っていったという、たいへん皮肉で必然的な帰結が惹き起こされているのである⁷³。

まずは、無理にでも子どもや若者に〈対話〉を促す教育が必要であるように思われる⁷⁴。日本の幼稚園の場合、みんな仲良くするように教える。例えば、「次の遠足にどこへ行きたいか」と聞かれて大勢が海であったなら、山に行きたくても海と答える子どもが肯定されてしまう。しかし、アメリカなどの場合、自分が何をしたいのかを他人に影響されずにちゃんと言えたかが一番大事なので、そのような安易な協調姿勢は咎められるという。まずは、はっきりと自分の意志を伝え、そのあとで皆が合意できる案を模索する。前者のやり方が、〈正解〉に対する受動的態度であり、後者のやり方が、内発的に〈真理〉をめざす〈対話〉につながることは言うまでもないであろう。〈主体的真理〉というものは、決して〈内閉的真理〉ではありえず、〈内発的で社会的な真理〉のことであることを肝に銘じてもらおう。教師はどうしても知らず知らずのうちに〈正解〉への誘導を行ってしまうが、このことを自覚的に戒めて共に一兵卒として〈真理〉を探究し、子どもだからと遠慮することなく、相手を尊重して〈対話〉を挑むべきである。その際、言い方にはもちろん配慮が必要であろうが、〈真理〉については一歩も引かない態度を身をもって示すことが一番大事だと思われる⁷⁵。社会のモラルというものも、〈理性〉を信頼して内発的な〈普

⁷³ 或る学生の話では、ゆとり教育以降の道德教育が〈対話〉を困難にしてきた原因ではないかと言う。彼女が受けた教育では、いろいろ意見を言わせるが結局は「みんな正解」になるので、言う甲斐がなかったし、「みんな正解」と言いながら、最後にプリントで〈正解〉が配られるので、言ってもしかたがないということが体に叩き込まれたというのである。この種の道德教育が本当に問題なのだと思う。

⁷⁴ 斎藤環氏も言う。「教育現場では、「協調性＝空気を読む」という才覚よりも、論理的思考のほうに価値を置く態度を貫くべきだと思います」（斎藤環＋土井隆義「若者のキャラ化といじめ」、39頁）。

⁷⁵ 教育や哲学は万人に開かれているものであるが、それなりの厳しさも示すべきだと思う。「授業を受けて、私が考えていることは、深い思考の末に生まれたものではなく、薄っぺらいものであったなと感じた。私もそれなりに、正義や幸福についての意見は持っているつもりだが、心の中で思っているだけで、それを表現したり、ましてや、他人と議論できるようなレベルには達していない。議論ができるレベルにまで引き上げていきたいと思った。また、哲学に対する見方も変わった。私は哲学に対して、なんとなく抽象的なものだと考えていたが、実際はとても理論的なものであり、哲学者の考えを読んでいる時は、まるで、数学の証明問題を解いているような気分だった。極端な話、自分の考えを主張していれば誰でも哲学者になれるのでは、とあってしまっていたが、自分の考えをしっかりと論理立てて話すことができ、しかも、それに説得力がなければ、哲学者にはなれないのではと思った」（2014年7月31日学生Y.Y.の「哲学通論」期末レポートより）。

遍的善〉を探究することによってしか機能しない状況にあると思う。やはり、〈対話〉を扶養するしかないと思われる。親密圏の〈空気〉に支配された共同体に依存するのではなく、〈真理〉の共同体をみずから担うことによって〈自尊心〉も獲得してほしい。

現代日本において優しく支援し導くことは同調圧力を高めることになりかねないということに自覚的であってほしい。「少しでもはみ出たらいじめるぞ」という恐怖を語った学生の言葉を思い出してほしい。彼女が言う「まず、いじめの問題を解決していくべきだ」というセリフは、優しい大人たちにも向けられているのである⁷⁶。

おわりに

人は一人では生きてゆけない。「(一人) ぼっち」になることへの恐怖心は至極当然なものである。しかし、人間は身近な他者といつも具体的につながっていなければならないというわけでもない。身近な他者との関係も重要であるが、価値観の共有さえ信じることでできれば、常に具体的につながっていなくとも、関係を維持できるはずである。身近な他者からの具体的な承認を絶えず過剰に求めてしまうのは、この価値観の共有を信じられなくなってしまうということ、否、共有をめざす必要さえないと思込まされてい

⁷⁶ 2014 年度春学期の「哲学通論」では、まずは徹底して〈相対主義〉批判と〈対話〉の必要性について〈対話〉を試みたが、一定の成果はあったと思う。或る学生は言う。「日本が〈対話〉をするには向かない環境であると考えられる理由を、相対主義的風潮が流行していることに焦点を当て、二点挙げる。一点目は相対主義的風潮を善しとする学校教育のあり方である。そもそも、疑問を抱かずただ受け入れようとする傾向のある幼い頃から、「考え方は人それぞれ。それが良い」ということを植え付けられていることに問題がある。現在、大学生になった私が哲学通論の講義を受けて得た考え方とは大きく異なることを、ほとんどの日本人が当たり前のように聞かされてきたということだ。二点目は、物事を間違ったふう勝手に解釈する傾向を持っていることである。「尊重」についての解釈、集団主義や個人主義のとらえ方、そのどれもが日本人を議論や〈対話〉から遠ざけている。そのうえこのような間違った解釈が、「居心地のよい(?) 社会(?)」を構成するのを助長しているのだ。最後に、この現状を打破するためにはどうしたらよいのかを考える。私は実際に、今回の授業を受けて文字通り「啓蒙」された気がする。つまり、哲学通論の授業のように、真の〈対話〉について納得させられる必要があるということだ。しかしそれは、機会がなければいけない。もう一つの方法は、実際に〈対話〉をしてみることだ。……実体験ほど説得力のあるものはないと考えるからこそである。真理により近い考え方はどれか、反駁されても反論できるか、単なる思考不足か…。いずれにしても、「真理に近づいた」という実体験によって〈対話〉の重要性に気づくのだと私は考える」(2014 年 5 月 8 日「哲学通論」に対する学生 A. K. のリアクションより)。

また、春学期の授業で一番印象に残ったことは何かという問いには、過半数の学生が〈相対主義〉の問題と答えてくれた。「春学期の授業のおかげで、まさに「日本人が陥りがち」な、偏った思考から抜け出すことができつつあります。……〈対話〉に臨む姿勢を問い直す授業が印象に残っています。というのも、「今までそうだと思い込んできたことが間違いで、正しい考え方があることに気づかされ、自分の考え(というよりも思い込み?)を改める」ということを体感することができ、そのうえ内向き傾向にある自分を根本から洗い流す機会となったからです。授業を受けるまでは、相手や相手の意見を尊重することとは、相手を心理的に傷つけないことや相手の意見に対して干渉したり反論したりしないこと、つまり〈対話〉しないことだと思っていました。しかし〈対話〉を避けることは、ひょっとすると間違っ

ることからの帰結ではないだろうか。一人で飯を食べているところを見られることを恐れるような状況は、もはや望ましい社会のあり方ではないだろう。わが国にこのような状況が惹き起こされた背景として、二つの点が指摘されうる。一つは、多様な価値観の流入によって、「世間」を筆頭に「空気」のようにわが国の価値観の比較的安定した共通基盤となっていた諸装置が壊れてきているという点、もう一つは、にもかかわらず、人々が受身でしか価値の共有をはかれないという点である。阿部謹也氏なども指摘したように、欧米の「社会」が「個人」によってつくられ変革されうるものであると実感されているのに対して、「世間」は変えられない所与として「シカタガナイ」「しょうがない」ものと受けとめられてきた⁷⁷。だから、二つの背景は「壊れてきた世間（空気）に価値観を依存することをやめられない」という一言に集約できる。抑圧的な世間が解体されてきたのだから、内発的に自由に価値を発信してゆけばよいのだけれど、そう向きを変えられないところが一番の問題である。

個性化教育によって、個人の価値観の尊重が叫ばれたが、この価値観は、内面化され、〈社会〉に発信されることがないどころか、実は、その人自身の行動すら律していない、いわば「観賞用」の価値観でしかないように思われる。人々の実際の行動を拘束しているのは依然としてそれぞれの〈空気〉であり、〈空気〉を読んでその都度のルールを察して

ているかもしれない相手の考えを正しい方向へ導くことができないばかりか、相手を〈対話〉が通じない者と見なしていることにさえなりうるのです。また、〈対話〉によって自分の考えが間違っていたことがわかって、それは決して恐れることでも恥じることもなく、むしろ歓迎されるべきことだということもわかりました。考え方（候補のようなもの）のうち間違っただけの一つが、〈対話〉によって消され、真理に一步近づいたというわけなのですから」（2014年10月2日「哲学通論」に対する学生A.K.のリアクションより）。

また、今回の授業でも、授業の前後に公開リアクション・ペーパーを提出してもらい、互いに熟読することを義務づけたが、いつものように学生の理解を確認するために有用なだけでなく、教育効果としても手ごたえを得た。「これまで授業を受けてきて気づいた今までの自分の正義の考えで最も大きな間違いは、正義を外部から与えられるものとして見ていた点である。……自分が想像していた講義は、正義についての多様な考えを比較、検討してよりよいものを見つけるという内容の講義だった。つまり正義を自分の外部に置いて相対的見地に立ってそれらを検討していくというものである。……正義はそもそも自分の外部にあるものではない。正義は私たちが現実の中で正しい、あるいは理不尽だと思うところから始まるものである。……己の中に正義を探すことが普遍的な正義への第一歩なのだろう。これを他の人に気づかせるにはどうしたらいいのか。自分には具体的な議論の正しい進め方はわからない。しかし一つ言えるのは、たった1,2回の授業では自分はこの結論を理解し、納得することはできなかったということだ。……もし自分の理解を越えるスピードで議論が進められてしまえば、途中で考えることをやめ、この結論自体を自分の外部に置いてしまうかもしれない。この授業の中ではこの結論が正しいとだけ理解して、とりあえずその考えに従うだけになっただろう。一週間の時間のはさんで、なおかつリアクションを書いたり読んだりすることを繰り返していくことで理解が可能になった。自分が今までの授業を要約して友達に一方的に話しても理解されないと思う。正義の議論には対話が必要だし、対話には一定の理解が必要だろう。ともかく結論を急げば真の理解からは遠ざかることになると思う（2014年5月29日「哲学通論」に対する学生Y.S.のリアクションより）。

⁷⁷ 阿部謹也『学問と「世間」』（岩波新書、2001年）111頁以下参照。

ふるまっているのである。ただ、その空気の適用範囲が狭くなり流動性も増したので、みんなが「浮かないように」必死でしがみつくなことが、全体としてのモラルの低下、不安による心の病を惹き起こしているものと思われる。もはや枠は当てにならないので、内発的に自発的に考えればよいのに、向きを変えられないからこうなってしまう。〈内閉的な本当の自己〉と〈外面的・社会的に同調する自己〉との分裂について語ってきたが、価値観に関するかぎりは、表面的に同調しているだけとは言えないかもしれない。浮かないように合わせるのとは、単に「自分らしさ」を錯覚かもしれないにしても身近な他者に具体的に承認してもらいたいからというよりもむしろ、淀みなくスムーズにコミュニケーションできていることが、内容はよく分からないが価値観を共有できている状態をつくりだせていると思えるからなのではないだろうか。

県民大学のような生涯学習講座で年配の方々と〈対話〉をすると、以前の学生たちと同じように、充実した〈対話〉が安心してできることに驚いている。もちろん、年を重ねて価値観は固まってきているのだが、少なくとも講座の場では、今の若者よりは自由に考えることができる。これは、基本的には皆と価値を共有しているという実感・安心感（幻想かもしれないのだけれど）があるので、恐れることなくいろいろな考えをしてみることが可能なのだと思う。われわれや以前の学生たちが比較的自_レ由（自_レ発_的）に真理を探究できた（実際の行動はともかく）のも、同様の事情からだと思われる。現代日本の若者たちは、思想においてすら、そういう（社会に対して能動的な）自由をもつことができなくなっている。ただ、そうした価値共有の実感・安心感が扶養される社会が受動的に若い人たちに提供されることは、もはや（現状の世界では）不可能なので、〈対話〉を促し、彼ら自身に能動的にそういう社会を形成してもら_うほかないのである。そのためには大人がみずからの価値観に安住せず、血を流してでも彼らが変わる捨て石になる覚悟を決めねばならない⁷⁸。

⁷⁸ 現代の若者の依存性にメスを入れるためには、まずクラス制度の廃止と担任の貼りつけをやめることが先決であると思われる。筆者自身の30年以上前の経験から言っても、人は強いられなければ根本の姿勢を変えることはできない。筆者の場合、高校生までは現代の若者に劣らず社会に対して受動的で享受的であったが、大学に入ってクラスも担任もなくて、みずから動き出さなければ何も始まらない状況に追い込まれたことが、人生を変える何ものにもかえがたい貴重な経験となった。社会に対して徹底して内向きの人間を変えるものは、お仕着せの〈つながり〉ではない。そうではなく、本人自身が内発的に動かざるをえない状況である。受け身で済んでしまうような制度を撤廃すること、これが一番重要な方策であるように思われる（おまけに、人間がばらけてくるので、個人で積極的に他者にアプローチしやすくなる）。もちろん、状況に応じて教師がみずからの責任で個人的に助けることには問題はない。問題なのは、依存を許容（助長する）する制度である。大人は保身のための責任回避の支援を自粛し、責任を追及される危険に身をさらしても若者たちに自分で動かざるをえない状況を与え、みずからは彼らに気づかれずに見守るような方策を捻出しなければならない。また、今の学生たちの人間関係の改善のためには、「オリエンテーション」や「グループ活動」も含めて、彼らが同質集団（なかよしグループ）で受動的に動くことを権力者が助長するような状況をつくらないう、細心の注意を払うことが肝要である。

⁷⁹ 阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』（岩波書店、1996年）、森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社選書メチエ、1996年）参照。

欧米の〈社会〉は〈個人〉がつくると言ったが、この〈個人〉という観念を誕生させたのはキリスト教であり、自由の国アメリカの個人主義を支えているのも実は宗教であるということは、周知の事柄である⁷⁹。価値観を他者と共有できているという実感もないという意味で孤高に生きることのできる〈個人〉など、どこにもいない。わが国の若者は「確固とした強い自分」に憧れるという場合に往々にして誤解をしている。しかし、共有する価値は、身近な他者の具体的な承認によってしか確保されないわけではない。現代の日本においては、もはやこのやり方では十分な安心感を得ることは不可能である。そうであるなら、受動的な態度を脱し、内発的に価値観を共有すべく〈対話〉へ踏み出す勇氣をもつ以外に、モラルも自尊心も回復する道はないのではないだろうか⁸⁰。

日本が欧米のような訴訟社会、討論社会になってほしいわけではない。一神教の伝統のないわが国には、欧米流の権利・自由中心社会はそぐわないであろう（ただし、どれほど表面上の治安の維持に好都合であろうとも、現代日本の社会状況は、若い人たちのメンタル面にとっては不健全な状態であり、これに比べれば、まだしも討論社会のほうが健全であるようにも思われる）。受動的で内向きな日本社会と、訴訟・討論に明け暮る価値の共有を断念しがちな欧米社会とのどちらが〈対話〉社会への移行に有利であろうか。実は価値を共有するという意識をもっている日本人が、もう少し自発的になりさえすれば、〈討論〉社会に墮することなく、真の〈対話〉社会を実現できるという希望を信じたい。

世界中で評価される日本人の「思いやり」や「優しさ」は日本が誇る美德である。こうしたものを捨て去る必要はない。しかし、そうしたものをただ習慣で受動的に扶養するだけでは済まない状況に追い込まれてきている。〈多元的な社会〉で生きてゆくかぎり、〈対話〉を厭わず〈真理〉を支える〈理性〉に伴われてはじめて、その美德は真価を発揮するのではないだろうか。

*引用文中の〔 〕内および……は引用者による補足と省略であり、傍点による強調は原著者、筆先傍点による強調は引用者による。

*本文および注の中の引用から分かるように、学生たちとの〈対話〉からとても多くのことを学んだ。特に2014年度筑波大学人文学類開設「哲学通論」に参加してくれた学生たちには厚くお礼を申し上げたい。

⁸⁰ 鴻上氏は前掲書243頁以下で、複数の共同体にゆるやかに所属する生き方を提唱している。宮台真司氏も昔そのような提案をした（『サイファ 覚醒せよ！ 世界の新解説バイブル』（筑摩書房、2000年）83頁以下参照）が、このやり方は、特に日本では、うまく機能しないと思われる。従来、共同体所属がうまく機能したのは、そこに拘束力があったからである。出入り自由な共同体は拘束力に欠ける。多元的所属を生かせるのは、鴻上氏や宮台氏のように既に自己拘束できる（責任感や自尊心を獲得済みの）者だけではないだろうか。都合がわるくなると次々と所属先を変えるような受動的姿勢になりがちな今の若者にとっては、このやり方は実は得策ではない。ただし、〈いじめ〉や同調圧力に苦しむ者が緊急避難的に利用することはありだと思われる。

Dialogue and Truth —— For the revival of education and moral ——

Yoshishige HIGAKI

The purpose of this paper is to describe the problems of the malfunctioned dialogue in the classroom in Japan. Young people have a great contempt for a univesal truth, so they do not carry on a dialogue for truth. Why do they look down on a universal truth ? In the postwar education in Japan, this contempt was planted in them. Teachers recommended the ideas of the relativism to children. It was to avoid a conflict in the classroom. What is worse, peer group pressure has increased among the young people recently. Therefore they absolutely avoid a dialogue. In this paper, the key to the solution of these problems is looked for.